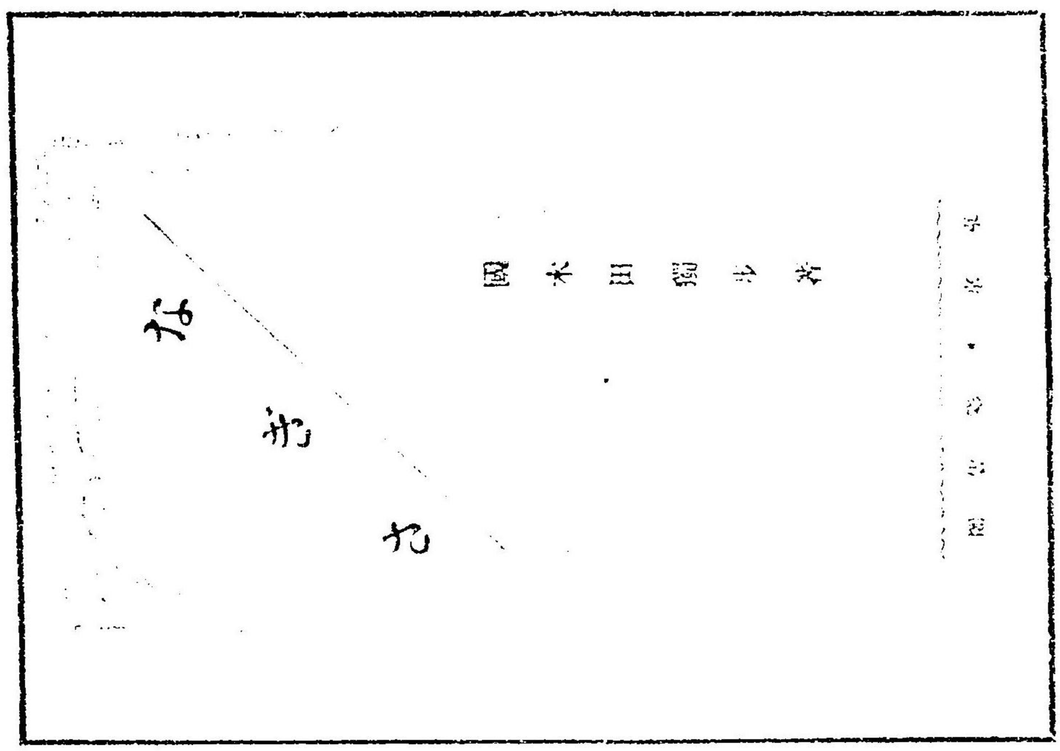
渚

國木田獨步著

94
578



94-596

(目　次)

渚……一
岡本の手帳……一九
暴風……四三
決闘家……一三五

渚

國木田獨歩

K生が轉地先から親友のT君へ送つた手紙を集めて「渚」と題したのである。「渚」には種々のものが漂着するが、どうせろくな物は無い。加之に悉く斷片で滿足な代物は一箇もないといふ意味である。轉地先が海岸だからでもある。

K生の病氣は呼吸器病だ。熱の有る時と無い時とある。手紙は無い時書くが熱が出て來ると中止して其まゝ封じ

て了ふ。だから愈々要領を得て居ない場合がある。

(一) 里芋

今日太陽が落ちかゝつてから散歩に出た。斷崖の上の孤屋を出ると野は淋しい。家の前の村道は人一人通らない。畑は此頃刈り盡されて眼界が俄に廣くなつた氣がする。廣い廣い野原が秋の末寂寥しく天外の連山に接して居る。

生きるか死ぬるか解らない病人が一人ぶらぶらと此野末を歩いて居る。それが僕だ。可愛さうに蒼白い顔して深い嘆息すらも得爲ないで、取留もない事を思ひながら歩いて居る。それが僕だ。

電信柱の尖頭しか見えなかつた縣道を忙急しさうに往來する人や車が小さく黑く見えるやうになつた。日暮だからそれもちらりほらりだ。

三坪ばかりの里芋畑が路傍にあつた。周圍の陸稻や粟が刈り取られて、こればかりが黑い土から畑らしく殘つて居る。そよ吹く風もなく方幾里の野は森として居る中に、此畑の里芋の葉は、ふら〳〵と動いて居る心臟形を引延したやうな廣い葉が相並んで左右に頭を振て居る樣は器械仕掛のやうだ。思ふに吹かじと見ゆる秋風は低く地に潜んで流れて居るのであらう。僕はちよつと佇立まつて之を見て居

たが

いやだ〳〵と畑の里芋は

かぶり振り〳〵子が出來る

といふ里歌を思ひ出した。何故そんないやな里歌を思ひだしたかと責めたつて仕方がない。其處に『畑の里芋』が歩いて來る。

十八九の娘が何か口の中で僕に挨拶して行き過ぎた草籠を背負つて古手拭を冠つて跣足である。丸顔で愛嬌はあるが並の田舍娘だ。

此『里芋』の身の上を僕の聞いて居る丈け話すと極めて簡

單である。今年の春、此里から五六里離れた某村から二人の娘と、一人の若者が此里へ流れこんだ。

『何故又た其駈落ち者と一同になつて飛び出したのだらう』

『何故ですか』と家の聾は氣のない返事をする。

『二人で一人の男に惚て居たのじやないか。』

『さうかも知れません。』

『それなら彼奴は捨てられたのだ。可愛さうに。』

『なアに平氣な者です。』

『まさか平氣でもあるまい。可愛さうに』と、僕は頻りと可

愛さうがつても婆やさんは澄したもので

『だつて最早腹が膨れて來たぢやアありませんか。』と言つた。

僕は此時初めて此娘が妊娠して居ることを知たのだその後氣をつけて見ると腹が膨くれて居るやうに見えるが、未だ眼に餘る程ではない。

要するに三人で駈落して、間もなく此娘だけ此里に取殘され、今更我が村にも歸り惡いといふので僕が今住んで居る別莊の世話をして居る何屋に賴み雇人同樣に使はれて居るのである。そして何時の間にか妊んだ。そして其親芋は

誰であるか僕は知らなかつた。

僕は散歩から歸つて婆やさんに

『子婆やさん、そら何屋のこれサ』と腹の膨れて居る手眞似をして『あれは何と言つたけね、名は。』

『お菊やんですか、それが如何かしましたか』と笑ひながら尻上りの言葉で聞いた。

『今其處で逢つたが仲々愛嬌のある眼元をして居るね。』

『今夜お入浴を貰ひに來ましたら旦那樣がさう云つたと喜こばして遣りませう』

それから僕は夕飯を食ひながらお菊の相手は如何な男だ

と聞くと婆やさんは初の中は笑つて言はなかつたが僕が『それじやア僕が言つて見せやうか、何屋のこれだらう』と親指を出したので喫驚して其を打消し、とう〳〵白狀して了つた。

無論判然したことは言へないがお菊やんの相手は二人あるらしい。其一人は漁船の若者で一人は或百姓の隱居だといふことである。

行末は如何なるだらう。斯ういふ女は其場に臨んで行塞ると思ひ切つたことをするものである。若し二人の男に捨てられたら防波堤の鼻から飛び込み兼ねない可愛さうに斯

ういふ女は自殺の術を知つて居る獸だ。それも優しい小羊だから猶ほみじめだ。——と僕は感ぜざるを得ない。

疲勞たから最早筆を擱めるが今僕が書いてる中にそら、湯殿でお菊の聲が聞こえる。聾の婆やさんと何事か面白ろさうに土地訛で話して居る……。

（二）單調

君の手紙を見ると色々な事が言ひたくなる。然し口から耳へでないから牾しく感ずるばかりだ。

此三四日晴天續きで病人には幸福である。日出るより日入るまで椽を週つて日光が射込むから隨分溫暖である。溫

暖は僕に取つて何よりの藥餌だ。但し東風が太平洋かりなしに吹きつけるから壯健者は兎も角僕は外出が困ある。海濱に居て風のない日を求めるのは求める方がかも知れない。

霧は絶無だ、空氣は澄みきつて居る。近郊には林を見受ない、たゞ見渡す限り平板な畑が際限なく連なつて居るばかり。斯くて海も單調、陸も單調、これが此地の特色とでも言はうか。とても南方の國の海岸のやうに參らない伊豆半島の如く高嶺の半腹を無心の雲が悠々浮動するなど思ひも及ばぬことだ。さればとて又武藏野郊外の雜木林の風趣

など藥に爲たくも無い。

單調又た單調！　漠漫たる太平洋を眺め入れば實に單調其物である。其廣大なるだけ其れだけ單調の感が深い。そして更に單調なる大空が無際限の色を其上に垂て、水と空と相呼應して居るのを眺めては、遂には宇宙其物の單調を思はざるを得ない。

單調は「永結せる永遠」の聲だ。單調は死滅だ。實に人をして消魂に堪へざらしむる。神秘！　神秘！　此に於て人が神秘に唯一の逃路を求めるのは是非もない事だと僕は思ふ。

(三) 田舍町

僕の家に黑塗の深い寫眞箱がある。多分君も見たことがある筈だ。種々の寫眞が混雜に入てある。其中に田舍町らしい所を縱に撮つた寫眞がある。何時ごろから此寫眞が僕の——といふよりか家の寫眞箱に入つて居るのか知らないが。僕が寫眞箱を引掻き廻す毎にちよい〳〵と澤山の寫眞の中から現はれて僕の眼に觸れる僕は氣にも止めず、しみじみ手に取つて見たこともなかつた。

所が此處に轉地する前の晩、寫眞箱を持ち出して從來に遊んだことのある名所や溫泉や海岸などの寫眞を撰り出し

て見て居ると例の田舍町の寫眞が出て來た。

古いので多少が變色して居るが然し明亮して居る。初めて手に取つて能く見た。何處だが全然解らない。何しろ僕の知らない場所だ。家並は揃つて居ないが其でも町の姿は出來て居る。

この寫眞こそ今度僕が初めて來た此地の町であつたといふ譯ではない。さうではない。此寫眞を見た時の心持と昨日の夕暮に初めて此處の町を散步した時の心持と同じであつたといふのである。

僕は寫眞を見て色々の感想に耽つた、間近の家の軒下に

一人の男が立て居る。往來はさびれて人ッ子一人通つて居ない。既に寫眞である以上、天涯地角、何處かに此町が現存して居るに相違ない。併し僕とは何の緣もない。緣がないだけ、つくづくと眺め入れば入るほど言ひ知れぬ懷かしい心持が加はつて來る。寫眞を横にしても縱にしても、隱れた家の見える筈はないが而も僕は如何かして軒先しか見えない家を能く見た心地がした。冬ならば雪も降らう雨の日は尙ほ淋びしからう。夜は軒先に燈火もちらつくだらう。彼の男は今も生きてるだらうか。など思ひつゞけた。

然るに僕が此地に來て一月以上もなるが、昨日の夕暮、

所謂るかはゞた時に初めて町を散歩して見た。褞袍の上に帶をしめたまゝで、別莊を出て暫時夕闇に立つて居たが、ふと坂を下る氣になつて今までは庭先から眼の下にのみ見て居た此處の町端れに出た。町とは名のみ凸凹した礫原道を挾んで家が並んで居るばかりである。道の兩側に小溝があつて家の前に人が通るだけの板が渡してある。僕は何思ふとなく。此町の入口に立て居た。此時僕の心にしんみりと潛やかに流れこんだ心持は則ち彼の寫眞を見た時の心持と同じであつた。彼は寫眞、これは實物、而も僕が全然、この一團の人寰に緣もゆかりもないことは同じである。こ

れが過去千年の昔であらうと、將た渦卷き疊なる夏雲の谷間に眠る町であらうと同じてある。時も場所も無關係である。たゞ此處に血あり肉あり、生あり死あり、戀あり恨あり嘆あり喜ある人の世が僕の前に横はつて居るのである。

擧げて永劫の海に落ちゆく世々代々の人生の流の一支流が僕の前に横たはつて居るのである。

僕はのそり〳〵と歩いた。寫眞でないから何の家でも見られる。軒先に立つて暮れゆく空を茫然と眺めて居る男も居た。

小さな石橋を渡ると右へ入る狹い横道がある。突然女の

叫ぶ聲が其間から聞えた。聲を限りに罵り叫喚いて居るらしい。僕は思はず其横道に入つた。

此處まで書いて來たが、最早疲れ果てたから簡單にする。

年頃五十計の狂婦がたゞ一人叫ぶのであつた。

『畜生！　恩知らず、惡黨、馬鹿親爺！』これだけの事を繰返し〳〵怒鳴つて居たのである。

そして僕が別莊に歸つて見ると一人の老人が訪ねて來て居た。此老人か狂女の所謂る惡黨の恩知らずであつた。

詳しいことは次便に申上げる。風が出て海が鳴つて居る——。

岡本の手帳

左は「牛肉と馬鈴薯」の主人公、岡本誠夫の手帳より抜き書きせしものなり、此主人公に同情ある人には多少の興味あるべし

○

わが願は世のつねの願にあらず。この願の叶ふ時はいつなるべきか、わが命の此世にある間、叶ふまじとも覺ゆる。もし然る時はわれ五十、七十、百歳の壽を保ち得んも、それは空しき夢の命のみ、われは此世の人の命をば夢の如きものと觀ずることなきにもあらねど、人生は眞面目なるもの

在りといふがわれの信念ぞかし、然るにもし此願叶はずして在らば、わが命はまことに夢よりも空しきものならん。一生を夢と送る、これにも増して哀れのことやあるべき。この願とは何ぞや。げに世の常の願にはあらず。かゝる願を懷くもの今の世に多くありとしも覺えず、われはこれを悲むものなり、世の人は夢の如くに一生を送るなり、われはこれをあはれむ。この願いだかぬ人は影の如き人ぞかし。これ誇りたる言葉にあらず、われはかく信じて疑はざるなり。

わがこの願の叶ふと叶はざるとは偏に神のみ心にあるこ

となれど、わがこの願を懷くことはまことに神のめぐみなり、われはかく信じて疑はず、わが幸をよろこぶものなり。この願を懷くわれをわれみづから幸なりと信ずるものなり。この願もしも叶はゞ神のみめぐみ幾千萬人のものにも増して此あはれなるわが上に厚きなり。幾千億の人々は此願を懷くことだにせずして其命を了りたり。

全世界の人、悉くこの願を懷く能はずとも、われは此願を追ふべし。わが斯く言ふはすでに此願の幾分をとげ得たればならんと思はる。少も見ることなくば、見んことを願はざる人も或る奇しき物の端をだに垣間見んか、かれの願

はさらに能く見んことなるべし。このゆゑにわがこの願を叶はんことを切に願ふは、この願の少く叶ひ居ればなり。げに然り。げに然り。

この願とは何ぞや。如何なる願ぞや。

わが戀は遂げ得て又破れたり。わが妻、これを捨てゝ走りぬ。このゆゑにわが肉と心とのなやみしこと幾何ぞや。今も今とてわが心はこの傷に苦みつゝあり、今もなほをり〻神に祈ることは彼人の心に眞の情の泉ふたゝび漏て流れ、わがこの傷を清め醫さんことなり。されどこれわが切なる『この願』に非ず。詩人たらんことにや、あらず、剛强

正大の政府を建立して今の吾國を救はんことにや、あらず、基督教を吾國民唯一の宗教となさんことにや、あらず、これらはわが空想のみ、夢想のみ、『この願』には非ず。愛と信と義とを完ふせんことにや、あらず、君子たらんこと、聖人たらんこと、偉丈夫たらんこと、これ皆『この願』にはあらざるなり。

山林の自由の生涯にや、嗚呼われは實に山林の自由を希ふものなり、わが血はこのために躍るぞかし。山林に自由存す、われ此句を吟ずる時、わが筋肉の波立つを覺ゆ、言ふ可からざる誇、まなじりの光となる。されど、これ亦、

わが切なる『この願』にはあらず。

嗚呼然らば、この願とは何ぞ。

父母いたく老い給へり、此世に在す命も長かるべしとも覺えず、一日も永く壯健に在さんことはわが願にぞある。

されどこれとてもわが切なる『この願』にはあらず。

宇宙は不思議なり、人生は不思議なりと人も言ひ、われも言ふ。科學と哲學と宗教とは此不思議を滅さんと力む。

わが願も亦、科學者として、哲學者として、宗教家として此不思議を闡明せんことにや。あらず、あらず、これわが『この願』にはあらざるなり。

然らば何ぞや、わがこの願とは。

美と眞と善と、わが願はこれを求めんことに非ず。若しわが『この願』叶はずんば、美も善も眞も、空のみ、影のみ、まぼろしのみ、題目のみ、稱呼のみ。

カライル曰く

Awake, poor troubled sleeper:

Shake off thy torpid nightmare-dream.

わが切なるこの願とは。眠より醒めんことなり、夢を振ひおとさんことなり。

この不思議なる、美妙なる、無窮無邊なる宇宙と、此宇

宙に於ける此人生とを直視せんことなり。われを此不思議なる宇宙の中に裸體のまゝ見出さんことなり。

不思議を知らんことに非ず、不思議を痛感せんことなり。死の秘密を悟らんことに非ず、死の事實を驚異せんことなり。

信仰を得んことに非ず、信仰なくんば片時たりとも安んずる能はざる程に此宇宙人生の有のまゝの恐ろしき事實を痛感せんことなり。

われはわが心の眼に厚き膜の覆ひ居ることを感じつゝあり。われは夢魔の支配のもとにあることを感じつゝあり。

これを感じ得たるはまことに神のめぐみなり。今はこの膜の破れんこと、夢魔を追ひ拂はんこと、を切に願ふにいたりぬ。

この宇宙ほど不思議なるはあらず、はてしなきの時間と、はてしなきの空間、凡百の運動、凡百の法則、生死、而て小さき星の一なる此地球に於ける人類、其歴史、げに此われの生命ほど不思議なるはなかるべし。これ誰も知る處なり、而て千百億人中、殆んど一人たりとも此不思議を痛感する能はざるなり。友人の死したる時など、獨り蒼天の星を仰ぎたる時など。時には驚異の念に打たるゝ事あるは人

人の經驗する處なり。されどこはしばしの感情にして永續せず。わが願は絶えず此強き深き感情のうちにあらんことなり。

何故にわれは斯くも切にこの願を懷きつゝ、而も容易に此願を達する能はざるか、夢中にありと知りつゝ、何故に夢よりさむる能はざるか。

英語に Worldly てふ語あり、譯して世間的とでもいふ可きか。人の一生は殆んど全く世間的なり。世間とは一人稱

なる吾、二人稱なる爾、三人稱なる彼、此三者を以て成立せる場所をいふ。人、生れて此場所に生育し、其感情全く此場處の支配を受くるに至る。何時しか爾なく彼なきの此天地に獨り吾てふものゝ俯仰して立ちつゝあることを感ずる能はざるに至るなり。

蒼天も星宿も、太陽も、山河も悉く此世間を飾る裝飾品とのみ感ぜらるゝに至るなり。

それ世間ありて天地あるに非ず、天地ありて世間あるなり。此吾は先づ天地の兒ならざる可からず。世間に立つの前、先づ天地に立たざる可からず。

何故にわれは斯くも切に『この願』を懷きつゝ、なほ容易に達する能はざるか、曰く、吾は世間の兒なれば也。吾が感情は凡て世間的なればなり。

心は熱くこの願を懷くと雖も、感情は絶え間なく世間的に動き、世間的願望を追求し、『この願』を冷遇すればなり。

怪しきまでに人は此天地の不思議に慣れて無感覺に安じ居るなり。墳墓の累々たるを見て平然たるなり。限りなき蒼穹を仰ぎ見て平然たるなり。

信仰と言ひ、悟道といひ、安心と云ふ。されど要するに

心理的遊戯ならざるは稀なり。何となれば彼等は驚異の感に打たれて天地の間に俯仰介立し、求めざるを得ずして神と道と安心とを求めたるに非ざればなり。われは已に此心理的遊戯に倦みたり。

余のこの願若し叶ふことなく、諸君も亦、かゝる願だに有たずとせば、吾等の宗教は遊戯のみ。吾等はたゞ自個の尤もらしき感情を弄するに過ぎざる可し。吾等の所謂信仰なるものは前提をあやまりたる結論よりもはかなきものなるべし。

政治や美文と並稱せらるゝ限りは宗教も遂に睡眠中のせいたくなり。

『神を信ずるもの、』彼等は自から斯く稱し居れり。然ば何故に彼等は世間的の煩に苦むこと多きや。何を着んと思ひわづらう勿れと主は敎へ玉へども彼等は是等を思煩ふのみに非ず如何に人に思はれん、如何に世の認めるならんなどをも思ひなやみ居るなり。是れ何故ぞや。彼等の神は天地の造りぬしならずして、世のものなればなり。彼等は神を稱して天地の造り主と讃ゆ。されど彼等は、此天地には極

めて冷淡なり。余は今、彼等と言へり、されど此彼等の内には勿論余も加はり居るなり。

人々各追求願望するところあり、善を求め愛を求め義を求む、これ等を稱して理想を仰ぐと稱す。其れより下ては功名富貴、樣々なり。此等の願望のために人々焦心苦慮す。されどわが『この願』よりすれば悉く末葉なり幻影を追へるなり、夢を追へるなり。

幻影よ、幻影よ、

人は悉く最大なる事實を見る能はずして幻影のみを見るなり。幻影を見るが故に事實を見る能はざるなり。幻影よ幻影よ消え失せよ。

吾等は最早太陽を見ざるなり、たゞ太陽の幻を見るのみ、月を見ることなし。眼底の幻影を見るのみ。

吾等は最早天地を見ることなし。腦底の印象物を見るのみなり。

吾等は遂に事實を全く離れて、たゞ幻影のみを見るなり。吾等は死を見る能はず、たゞ死體を見るのみ。生を見ることなし、たゞ生體を見るのみ。故に生死の不思議に打たれ

ずして生體の死體となりしを見るのみ。否、生體を見而して死體を見るのみ。

凡て人が事實を見ずして幻影を見るの尤も甚だしき例は死の場合なり。ルーテルは曾て其友人アレキスの電死を傍に見て、死の事實を見得たり。普通はたゞ幻を見るのみ。吾等の目さめし時と雖も、夢のうちに在る時と五十歩百歩の相違のみ。

明日も來るべく、今日は過ぎなんとし、昨日は逝きたり、日々同じ夢のみ繰り返へしつゝ過ぎゆく。實に憐れなるは、

この天地を夢にてつゝむことなり。

如何にすれば此の夢さむべきぞ、此方法もがな。利刄を以て肉皮をそぎ取るが如くに痛快に此心眼の被覆を去りたし。其方法もがな。

深夜、月に對して瞑想したり。薄暮、若王寺の丘上に立ちて大觀したり。されど僅かに心のをのゝきしを感ぜしに過ぎず。忽然としてさめざる也。

われ何處より來り、何處にゆく。死せし彼は何處にゆきし。此等の問を此宇宙に向て心から發し得んことは難い哉。されど此問を發せんことを吾が願なり。

われは此願の叶ふまでは如何なる手段をも取ることを辭せざらんと欲す。

上加茂の丘に登り、松によぢ上りて四方を見渡しぬ。されどわが見たる處は遂に幻影の外に出づる能はざりき。美はしき野邊の夕日影、大空をたゞよふ雲のむれ、はてしなき蒼穹、何れが『美』ならざらん。されどわれ遂に幻を見たるのみ。われの夢は少しもさめざる也。

たゞ世の卑しき空想のみに苦められき。

星みつ空、是れ又、幻影としてのみ見らる。われは遂に

幻影の外に出づる能はざる乎。

此世の名利の念に苦む。肉の事をのみ思ひわづらふ。これ何故ぞや。神を知らざればなり。否、世に住みてのみ居て、天地に住まざればなり。夢にのみ生き幻のみ描きて、此恐ろしき不思議なる宇宙に此身を見出すこと能はざればなり。

嗚呼吾は患難めるものなる哉。朝な夕な、夕な朝な、たゞ〳〵世の事をのみ思ひわづらふ。徒らにもがき、苦しみ、あせり、いらだつなり。

思へ、思へ。伴武雄何處にある、古川駒造何處にある、山口行一何處にある。有光里子何處にある、藤形何處にある。願くは吾心さめよ、嗚呼希くば吾心さめよ。

爾の今すむ處何處ぞや。これ舊き都に非ざるか。こゝには千年の歴史あり。されど平清盛何處にある。平敦盛何處にある。花の如き平家の公達今何處にある。

陰謀、企圖、叛亂の跡こゝにあり、其人等何處にかゆきし。足利義政何處にある、其銀閣寺は、十錢の見物料を徵して空しく明治の代の見世物となりぬ。豐臣秀吉何處にある。維新の諸豪傑何處にある。

あゝわれこゝに在り。われ茲に立つ。有りしものなし。今あるものも又た無からん。吾何處より來り、吾遂に何處にかゆく。願くは吾心さめよ。希くは吾がにぶれたる此心めさめよ。此世の夢よ、さめよ。わが願は宇宙の不思議を明にせんことに非ず、人生の秘密を明白に解剖せんことに非ず。

たゞめさめんことなり。『秘密』に戰慄せんことなり、『不思議』に驚魂悸魄せんことなり。

知れざるものは如何にしても知れずと。こゝに於て賢明なる人々は人生問題や宇宙問題に從事することを以て閑人の閑事業と見做し給へり。

然り、然り、知れざるものは如何にしても知れざる也。これを知らんことをつとむるは實に閑人の事なるべし。されどこれを以て宗教の人を嘲るに足らざる也。宗教とは宇宙人生の不思議を解釋せんがために起りしにはあらず。不思議を不思議と痛感して後起る處の信仰に出つて成るものなり。

有神無神の爭論に先だち人は先づめさめざる可からず。爾の宗教的信仰なきは、爾の心の痲痺を證明するなり。

神の人は言ふも畏し、ボーロやルーテルや、皆な『不思

議』にめさめて此幽遠宏大なる宇宙に於ける人の命運につき心をのゝき感あふれしなり。其火の如き信仰は止むことを得ずし起りし結果なり。

多くの科學者は不思議を感ぜずして『不思議』に弄ばるゝ愚者なり。多くの哲學者は不思議を感ぜずして『不思議』を退治せんと欲する夢想家のみ。

（なはり）

暴風

（一）

『兄樣今村のお國樣が入來しやいました。』

『珍らしことだね。』

『此處へお通しゝましようか。』

『オヤ僕に用があるの。』

『ハア、何だか兄樣にちよつとお目にかゝりたいッて』

『何の用だらう。』

『知りませんわ。』

『妙だね。』

『お通しゝましようか。』

『あア、それぢやアお通し。』

禮子は座敷の隅に重ねてある座蒲團の一枚を兄の正面一間ばかりの所に敷て、下に降りた。

間もなく十八九の小柄の娘が優に上つて來て莞爾笑つて敷居を隔てたまゝ坐らうとするので江崎富彌は

『何卒か此方へ。』

『ハイ。』

『何卒か。』

國子は富彌の書齋に入つて一通りの挨拶が濟み、勸めらるゝまゝ座蒲團を敷いた。

『遠い所を能く光來しやいましたね。』と富彌は机の上の煙草を採つた。燐寸を磨て火を點けながら其濃い眉をよせた。少し變な氣持がして、多少か狼狽して居るらしい。

『私、今日兄に內證で來たのですよ。』

『さうですか。如何して。』

『貴下昨日兄にお會になりましたか。』

『エ、、朝來られて散歩しようと言はれるから常例のやうに郊外に出かけました。』

『兄が何んか申しませんでしたか。』
『色々なことを言ひました。』
『別に變つた事は言ひませんでしたか。』
『さうですね、同じ事ばかり言つて居る譯にもいかんから色々變つたこと喋舌り合ひました。しかし要するに平常と同じ氣焰ですよ。』と富彌は微笑んだ。國子は眞面目な顏で富彌を見ながら考へて居る、やがて
『妙ですね。』と眉をひそめて嘆息をした。
『如何したのです、何です。』と富彌は驚かざるを得ない。
『此頃兄の樣子が變つては居ませんか。』と國子は重ねて問

ふた。
『さうですね、別に氣が付きませんが。』
『昨日は如何でした。』
『さうですね。』と富彌は行塞つて了つた。昨日目黑で晝飯を喰ふ時、平時二人で麥酒二本がお定例であるのに今村君は强て三本目を命じて殆ど一人でガブ〳〵飲だのを一寸妙に感じたが、まさか國子に二本のビールが三本であつたのが變であつたとも言へないから、默言つて居ると國子
『それぢやア兎てもお話したつて無駄でしようね』と落膽したやうに言つた。

『何です、如何したと言ふのです、被仰いな。先刻から貴嬢の被仰ることが變ですね何でも遠慮なく被仰いな。僕に遠慮することはないでしよう。今村君が如何かしたのですか。』

『さうです。實は兄の身の上に面倒なことが持上つて、家庭がごたゞくして居るのですよ。それで今日は父の使者で參りましたので、なんでも貴下に御相談を願つて貴下の御意見を拜聽つて來いと申しますのです。』

富彌は意外の感に打れた。

『如何なことです。しかし妙ですなア。それほどのことを

僕にこれまで全然話しも仕ないのは。』

『眞實にさうですよ。父も母も私も貴下にだけは必定多少か御相談して居るとばかり思つて居たのです。』

此時禮子が梯子段を上つて來て

『兄樣、今村樣が入來つてよ、今。』

『まア、如何しよう。』と國子は喫驚した。

『そして如何した。』と富彌は思はず鋭く問ふた。

『國ちやんが來て今兄樣とお話して居らつしやいますと言つたら、默言て考がへて居らしやつたが、又來ますつて去つておしまひになりました。』

國子と富彌は顔を見合した。

（二）

何も知らない禮子は二人の樣子のたゞならぬに氣が着いて

『國ちやんの入來やつてることを言はない方が可かつたのですか。』

『さうでも無いがね……まア可いサ、お前は下へ降りて……。』

禮子は逃げるやうに降りてしまつた。二人は尙ほ顔を見合はして居たが

『如何しましよう。』と國子は當惑し切た樣子

『如何しようも斯うしようも仕方が無いでしよう。今村君だつて貴孃が特に僕に會ひに來てると知れば、何の用事だといふことは直ぐ悟つたに違ひないでしよう。却て可いかも知れません。今村君からも知れたとなれば僕に相談するでしようから。』

兄に肖て思慮の深い國子は暫時く考がへて居たが

『眞實にさうですね。それでは皆な申上げて見ましよう。實は結婚のことです。』

『今村君のですか。』と富彌は意外。兄の身の上と國子は初

めからことはつて居るから今村の結婚にきまつて居りながら、富彌には全く意外であつたので思はず斯く問ふたのである。

『さうです兄の結婚のことです。御存知もなかつたでしようが、父は近頃急に何か思ひ着いたやうに兄の結婚をやかましく急いで來たのですよ。それで自分で勝手に所々方々に頼んでお嫁樣を探したのです。』

歳ごろ同志がこんな話をするので二人とも思はず微笑んだ。そして兄に肖て物に動ぜぬ國子も流石に頰を少し紅めた。

『可いのが見つかりましたか。』

『可いか惡いか兎も角も見つかつたのです。農商務省に出る高等官の令嬢で年は二十歳とかで、學校はお茶の水を卒業なすつて、それに音樂の方も專門の教師にお就になつたのださうですよ。』

『容色は如何です。』

『江崎樣の禮ちやんには敵はないけれど十人並以上だつて父が申して居ました。』と國子は微笑んだ。

『禮ちやんが別品かしらん……マア禮ちやんのことなんぞ如何でも可いとして容色も十人並以上といふなら一通りの

候補者ぢやアないですか。』

『それで父は最早直ぐにでも取り定めたいやうな風で口を利いた人に此方は承知したらしい事を言つたやうです。』

『そいつは隨分亂暴だね。併し貴嬢のところの父樣は行り兼ねませんね、さういふことを。』

『エ、、言ひ出しましたら何處までも意地張り通しますし、自分獨り定めで家庭のことなら何でも行つて了うのですよ。』

と憂愁の色は自から表はれる。

『それで今村君は如何いふのです。承知しないのですか。』

『何にも言はないのです。』

『承知とも不承知とも。』

『エ、、父は兄が事務所から歸つて來ると直ぐ兄の部屋に來て自分から媒介者口を利いて、鄕國も同じだとか仕度も十分だとか色々なこと申して勸めますが兄は一口も返事を仕ないのです。サッサと夕御飯を食て外に出て了ひます。』

『そいつは妙ですな。しかし今村君のことだから何か深い考へが有るのでしやうよ。それに同じく意地張の方だから何か考へがあつて何も言はないと決心したら父樣が勸めれば勸めるほど默つて了ひます。』

『ですから母も私も仲に入つて困り切つて居るのですよ。如何したら可いでしよう。』

『きつと今村君から僕に相談がありますよ若し二三日經過て見て相談がない樣であつたら僕から言ひ出して訊問て見ましよう。何しろ僕は父樣の一丁見で人間一生の大事を取りきめて其を今村君にわい〳〵と强ひつけるのは大不贊成だつてお父樣に仰しやつて下さい、今村君の性質としてお終には父の意に從つて一種の犧牲にもなるでしようが、それが決して好い結果に終るものぢやアないのです。貴孃は御存知かも知れませんが、これまでに今村君は一度甘じて

犧牲になつて居るのですからね。』

國子の胸にはひし〳〵と應へた、國子は一度兄が犧牲になつた意味を知つて居る、流石に友の同情は深いところにあると思つた。すると悲哀がこみ上げて來る。

『眞實に兄は可憐さうですよ。』と眼には涙の溢るばかり、

『何卒兄の心からの友は貴下ばかりですから、これからも力になつてやつて頂きます。』

（三）

國子が歸る時、富彌は梯子段の上まで送つて下へは降なかつた、下では母と妹とが頻に止めて夕御飯を食べて遊ん

で行けと勧めて居るやうであつたが、國子は堅く辭して歸つて了つた。

富彌は書齋の椽に籐の安樂椅子を持出し飽くまで晴れて水のやうな秋の夕空を眺めながら今村のことを考へて居たが、差當つて思ひ當る節がない。

昨日會つた今村龍一は富彌が十五の歳から今日まで兄弟同樣に交際つて來た人物と別に變りは見えなかつた。結婚問題など樣子にも見せなかつた。

承知、不承知、何れとも返事をしないのは兼ねて仲の餘りよくない父への片意地かも知れないが、まさか左樣まで

父を焦慮す筈もない。如何しても深い理由がある、會つて物を言はせる外、想像が就ないと富彌も斷念めて、たゞぼんやり外面を眺めて居ると禮子が梯子段の口から

『兄樣、御飯。』

『今直ぐ行くよ。』と未だ起ち兼ねて居る傍へ禮子は却つてやつて來て

『國ちやんの御用は何でしたの。』

『今村君の結婚問題サ。』

『まア！そして如何して。』

『如何もしないサ。禮ちやんを是非貰ひたいとサ。』

『アラ兄様はあんなことを！』と禮子が眞紅になつたのを見て

『アハツハツハ……』と富彌はどたばた下へ降りる、それへ續いて禮子は追駈けるやうに激しく梯子段を蹈んたので

『何ですねお前達は。』と先刻から食卓の一方に坐つて二人を待つて居た母に言はれて『何でもありません。』と富彌は尙ほ笑ひながら食卓に着いた。禮子は『叱られちやつた。』と小聲で言ひながら臺所へ行つて

『菊やお汁を盛けて來てお呉れな。』と命じて直ぐ引返へし同じく席に着いて眞面目な顏をして居た。

富彌はビールの獨酌、心地よげに一杯飲み乾して玆に睦じい晩餐が初まりかけると『國ちやんの用は何だえ。』と母親が徐かに其實待兼ねて問ふた。禮子は上眼で一寸兄の顏を見た。富彌は今度は眞面目に國子の言つた事を詳しく話して聞かした。母親は熱心に聽いて居たが

『ほんとに國ちやんは感心だねえ。さうやつて兄様の事を心配してお前の所へでも相談に來られるのですもの。眞實に毅然して居なさるねえ。禮ちやんなど比べると全で幼兒だ。誰だつて同じ歳だと思ひやア爲ない。それに今村様だつてさうです、富彌の一ッ上でも何から何まで五つも六も

上の兄様見たやうですよ。眞實に頼しい御兄弟だ。』

『オヤ禮ちやん計かと思つたら僕まで風向きが惡いぞ。』と富彌は微笑ながら飲みさしの洋杯を擧げると、禮子は

『全くですよ、兄様は如何だか知らないけれど私など國ちやんと比べると全く幼兒よ母上の被仰る通りよ。だつて學校にあんなにお友達が澤山居たつて國ちやんのやうに怜悧で毅然して居て、それに優くつて些少もお轉婆のやうな風のない方は全く無くつてよ。私國ちやんに比べて幼兒と言はれたつて口惜くも何ともありませんわ。國ちやんは別ですもの。』と大眞面目に述べると

『禮ちやん全然謙遜しちやッたね。それじやア僕も幼兒になるかな。』と富彌はビールを了つて茶碗を差出し、母に給仕を頼んだ。母親は

『それで如何いふ譯といふことがお前に解りましたかね。』と初めて本問題に返つた。

富彌は頭を横に振つて『少しも。』

母親は考がへて居たが

『必定今村様に思ふ人があるのですよ。私はさうとしか受取ない。』

『それア有るかも知れませんサ。それなら今の緣談を不承

知だと謝絶つて了へば可いでせう。』と富彌は討論でもするやうに言つた。

『さうは言はれないよ。不承知だと今村樣が謝絶れば父樣が直ぐ何故かと聞きなさるでせう、さうなると實は思ふ人がありますからと如何今村樣だつて容易く打明られるものぢやアありません。それで何方とも言はないでもぢ〳〵して居なさるのですよ。』と母親は得意らしく斷言した。

『成程それも一說ですね。』と言つて富彌は茶を求めた。

此時玄關前を掃て居た女中の菊が上つて來て

『今村樣がお見になりました。』と言ひさし親子三人驚いて

居ると『何だか大變御機嫌のやうで御座いますよ。』

（四）

今村の噂で持ちきつて居る處へ又た來たといふので咄嗟に何處へ通さうかといふ問題が起つた。平時ならこんな問題の起るべきではない。茶の間でも座敷でも書齋でも今村の方からサッサと通つて、富彌が其時坐つて居た室が直ちに談話室になるのであるが今日はさう行かない。

『やはりお前の室が可いよ。』と母親の言葉の未だ終らぬ中今村はヌッと入て來た。

『やア御飯のところですか。』と平時の愛嬌ある顏で元氣の

可い調子、此方は少からず狼狽いて母親

『否最早皆な濟ましたのです。菊や早くかたづけてお呉れ。』

『君、二階へ行かうか。』と富彌が起ちかゝると

『イヤ此處で可いぢやアないか。』と今村は長火鉢の横へ坐つて煙管を出した。卷たのと葉と兩方用ゐるのが此人の常である。

禮子と女中とで卓ごと持出して了つたので室は一度に片づいた。やつと電氣燈が點いた。何もかも綺麗に小器用に整理され物各々其處を得て居る八疊の一室が十燭の電氣で

急に明くなつた。今村の顏は眞紅である。

『大へん御機嫌のやうですね。』と母上も煙草を喫ひ初めて今村の煙管が今日は變つて居るのを見ながら言つた。

『事務所の大酒家とつきあつたものですから飲み過しました。江崎君とならこんなことはないのですがね。』

『さうでもないよ。昨日目黑で飲んだ三本のビールの二本は君だぜ。』と富彌はごろり横になつて今村と母とを等分に見て居る。國子の一件があるから心は如何しても穩かでない。

『一人で二本や三本なら我々だつて隨分例があるぢやアな

いか。昨日に限つたことはない。昨日はたゞ郊外散歩の常例を破つただけサ。』

『何故お破りになつたのです。』と母上はそろ〳〵遠廻に「さぐり」を入れはじめた。

『何故は困りましたなア。散歩が特別面白かつたから、ッイ景氣を着け過ぎたのでせう。ね、君。』と富彌に承認を求めた。

『どうだか。』

富彌は母の「さぐり」の方へ賛成した。

『どうだかは可笑い。實際さうぢやアないか。』と今村は笑

ひながら言つた。

『だつて常例を破つて景氣を着けるなんていふことは僕の役の方が眞實サ。そいつを君がやつたのだもの。君の平時にないことだから變に思はれても仕方がない。』

『ビール一本で變に思はれちやア堪ない。』

『だつて一葉落ちて天下の秋を知るとか何とか言ふぢやアありませんか。ビール一本だつて貴下の心を言はないとも限りませんよ。』と母上が眞面目で言つたので

『アハッハッハ……母上が大變なことを言ひだした。ハッハッ……』と富彌が先づ腹をかゝへた。

『ハ、ハ、ハ、さうすると何ですね』と今村は輕く笑ひながら『僕のはビール一本倒れて心の底を見せるといふ奴ですね。』

『まアそんなものです。』と母上も微笑ながら言ふ。

『愈々さうなるとビールも浮とは飲んことになつたぞ。』と今村は一寸眞面目になり『濟みませんが水を一杯……咽喉が馬鹿に喝いて……』

（五）

水と言はれて母上は茶すら未だ出さなかつたのに氣がついた。

『さう〳〵勝手なことばかり申上げて未だお茶も差上げませんでしたね……禮ちやん今村樣に冷水を上てください。』

廊下を一つ越した臺所で女中の手助をして居た禮子は早速水瓶に洋杯を添へて持て來た。今村はなみ〳〵と注いで飲み干し富彌に

『君は如何だ。』

『僕も一杯貰ふ』と富彌は腹這のまゝ水を注いだ。禮子が臺所へ引返さうとすると、今村

『禮ちやん、まア此處に居らつしやいよ。一葉落ちたりビール一本轉がつたり面白い話がありますから。』

『私も、彼方で聞いて居て笑ひましたの。母上は隨分面白いことを被仰ると思つて。』

母上は唯だ微笑のみ、富彌は國子の來たことを此方から言ひだして可いものやら、沈默て居て可いものやら、それが氣になつて兎角平時のやうに物が言へない。

禮子が又た立上らうとするのを見て、今村は懷中に押込んで居たはんけちの包を出して

『禮ちやんにお土産があるのだから、まア お待なさい。』と言ひながら包を解てリボンを取り出し『二つあるから、どちらでも可い方をお取りなさい。』

『まア綺麗。』と禮子は直ぐ手に取つて見る母上は顏を突出して

『まア綺麗。』

『兩箇とも同種ぢやアありませんか、今村樣』

『さうです。けれどつちか可いのがあるでせう。一箇は國ちやんにお土産。』

『それぢやア國ちやんとお揃ね。』

『え、お揃ひ。』

『まア嬉しい。』

『ほんとに何時もお土産ばかり頂いて濟みません

ね。』と母上は禮をいふ。禮子も禮を述べて直ぐ自分の用筥
笥に納ひ込んだ。其時、以前に今村から貰つたリポンが二
三種も其儘にしてあるのを見て、もう惜まないで使ふと思
つた。

『お蔭樣で少し酔が醒めた。サア少し歩かう。君散歩しな
いか。』と今村は富彌をうながした。富彌が未だ返事をせぬ
中に早くも母上

『まア可ぢやアありませんか。も少し居らつしやい。先刻
一葉落ちなんて、婆さんに似合はんことを言ひ出して皆な
に笑はれましたが、そんなことはどうでも可いとして眞實

に今村樣御酒を飲み過ごしてはなりませんよ。貴君も富彌
もこれからが盛りですよ。』

『全たくです。』と今村の聲は力あれども低し。

『それに胸に屈托があつて飲む酒は無理がありますから尙
ほ身體に利くさうですよ。貴下は決してそんなことは無い
でせうけれど若しか又、何にか思ひ艱んで居らつしやるこ
とがありますなら、足りませんが富彌は貴下の年來のお朋
友ですから無駄でも御相談なすつてね、何とかね、……』

母上は眼をしよぼ〳〵さして言ひ澱んだが、直ぐ思ひ切
つた口調で

『何處の親でも子を思ふ心は同じで結極は子の爲と思ふて何でもするのですからね。それに兄樣思ひの國ちやんまでが心を傷めて色々と心配なさるやうなことでもありますと、眞實にお可憐さうですからね……』

富彌は聽いて居て母上は思ひ切たことを言ひだしたものだ、今村も返事に窮するだらうと氣がついたから

『まア可い。何しろ散歩に出かけふ。』

（六）

今村と富彌が外出て去つた後で禮子と母上は差向ひになつた、

『母上隨分思ひ切つた事を被仰てね。』

『思ひ切た事つて？』

『だつて今村樣が如何な事を考へて居らつしやるか解りもしないのに國ちやんが可愛さうだなんて言つて了うんですもの。』

『大概分つて居ますよ。』

『何がです。』

『今村樣の胸の中は。』

『いくら母上に解つてたつて今村樣から未だ何とも被仰らないのに此方から言ふのは何だか素破拔くやうぢやアあり

ませんか。』

『今村様は言ひだし惡いから沈默て居らしやるのだよ。だから此方から口を切て上げれば必然直ぐ富彌に相談なさるよ。』

『それもさうですね。――そして母上は如何しても今村様は外に思ふ女があると思つて居らつしやるの。』

『さうですとも。』

『さうか知ら』

『きつとさうですよ。』と母は斷言した。

禮子は少し上氣てポッと紅味を帶びた美しい顏を暫時傾

て居たが、微笑ながら

『母上は如何な女だとお思ひになつて、今村様が思つて居らつしやる方は。』

『必定何にもかもよく出來て容色も美い方でせうよ。今村様のことだから。』と母上は禮子を見て今は特別此子は美しいよと思ひながら、眼を細くして言つた。

『さうか知ら。』

『さうですとも。』

『だつて今村様の傍には國ちやんが着いて居らつしやるのだから豪らいのなら餘程豪らくないとお氣には入りません

わ。そんな方があるでせうか。』

『まア無いやうだね。』と母は輕く應じた。

『さうでせう。』

『まアさうだね。』

禮子は又考へて居たが

『母上私は今村樣の今度の事は必然深い理由があると思ひますよ。或女を思つて居るなんて言ふことぢやア決して無いと思ひますよ。』と熱心に言つた。

『お前さんに解るものですか。』と母は平氣

『いゝえ必然深い理由があるのよ。だつて今夜の今村樣の

樣子は全く變ですもの。平時のやうに落着て居らつしやらないんですもの。そして何だか苦しいことを壓へつけて居らつしやる樣子ですもの。』

『おほ、ほ、ほ、ほ、……此子は詰寄つて來たよ』と母は笑つて何か言ひ出さうとする時富彌は歸つて來た。

『大變早やかつたのですね』と禮子は顏を見るや訊いた。

『何だか僕までが變になりさうだ。禮ちやんビールを一本御馳走なさい。』と富彌は其處に坐つて兩手の指を頭の毛に突込だ。

『まア如何爲たのですよ。』と禮子は呆れて訊く

『それよりか早くビールを、オイ禮ちやん』

『何ですね此子はビール〳〵つて。ビールは後でも飲めます。』と母も迫まつた。

（七）

禮子と母に迫られビールは後廻はしとなつた。富彌は嘆息をして

『矢張り駄目。』

『駄目つて？』と禮子は眼を据ゑて聽く

『今村君は何にも言はないのだ。』

『お前から切り出して訊いて見れば可いのに。』と母は焦躁

しさうに言つた。

『それは訊きましたとも、自宅を出ると直ぐ國ちやんが來て之れ〳〵の話があつたと言つたのです。さうすると國ちやんが來たことは僕も知つて居ると言つたぎり何にも言はないんです。』

『まア』と禮子は低い聲で哀しさうに言つた。母はたゞ眉を顰めた。

『國ちやんの來たことを今村君が知つて居ることは僕も知つて居るじやアないか、成程少し變だと思つて僕も默つて了つて無言で坂の上まで行つたのです。十日の月が能く冴

てるんでせう。お濠が霞んで佳い景色なんです。平時なら二人が面白い談話をするか氣燄でも吐き合つて散歩するのが今夜は無言でせう、僕も妙な氣持になつて來たから坂で別れて歸らうかと思つたのです。けれどもさうすれば國ちやんに頼まれたことが何にもならないでせう。どうせ言ひ出したのだからと思つて坂を下りながら

「承知とか不承知とか何方でも可いから明白に言つた方が僕は可と思ふがね。如何だらう」

と宥るやうに言つて見ました。矢張今村君は默つてるのです。そして顏を見るとあの威嚴のある顏が全然眞面目に

なつて居るのと月が正面に照して居るのとで凄いやうでしたよ。それで眞正面に向てのつそ〳〵歩く風は全然で僕の言ふことなど聽いて居さうもないやうに見えるのでせう。僕も少し癪に觸つたけれど、今村君が斯う言ふ傲慢な態度をすることは昔からの癖で、ひどく眞面目のときか、ひどく氣に觸はつたことのあつたとき能く此癖を出すのを知つて居るから僕は我慢して一緒に歩いて居ました。けれども終極がないから

「ね君、さうぢやアないか。然でも否でも何方か言へんことはないだらう。若しそれが言へんなら考がへてることが

あるから當分延ばすと言つたつて可じやアないか。」

と言ひました。それでも默つて居るのです。最早とても無益だから中止うかと思つたが、それでも

「强て君の秘密に立ち入る譯ぢやアないが國ちやんから聽かされた以上、僕も心配だからね。それに母でも妹でも君のことだといふと他人ごとゝは思はんで騷ぐ方だから今日だつて君の來ん前に色々なことを言つて氣を揉んで居た位だ。」

と言つて見ました。かう言へば何とか言はなければ濟むまいと思つたのですが矢張沈默つてるのです。そして急に

肩を斯う振つたのを見て僕は、グッと癪に觸つちやつたのです。何故なら今村君は他人から色々なことを言はれて最早辛棒が出來なくなると口に出さないて此身振をするのが癖でそれがサも、「うるさい！」と言つたやうに見えるのです。だから僕は思はず

「どうせ僕なんぞ君の相談相手にならないだらうけれど……」

と言ひますと、ぢろり僕を見ましたが、やがて言ひ惡くさうに

「君は本氣でそんなことを言ふのか」と訊きました。それ

が如何にも辛さうな聲でせう。僕は急に氣の毒になつて默つたまゝ歩いて居ましたが

「僕だつてさういふ外仕方がないぢやアないか」

と言つて今村君の顔を見ると眼に涙を一ぱい含ませて唇がぶる〳〵戰慄つてるのが月で能く分るのです』

『涙を』と禮子は思はず叫けんだ。そしてその美しい眼が濕つて來た。

『えゝ涙を。彼の強い男ですもの容易なことで涙など人に見せはしないのが兩方の眼に一パイ含ませて拭はうともしないのですそれを見ると僕は最早何も言へなくなつて丁度

目付の口まで行つた處で

「今村君今夜は此處で別れう……」と足を停めると今村君は何もいはないでずん〳〵去つてしまつた。』

（八）

麹町區土手三番町の閑靜な處に今村一家は住んで居た。黑い門の右に今村專一、左に今村龍一の二箇の木札が出て居る。專一は父で札が古い。龍一のは未だ新しい。

龍一が辯護士の試驗に及第して磯野博士の法律事務所に通勤を初めたのは一年前からのことで、其名札を門に掲げたるも其時からである。

父の專一は昔の判事で、多少の恩給は下るが其の半分は酒に化つて了ふらしい。鄕國の田地から上る小作米が今村一家の生活費の基礎を成して居るが其も決して豐ではないやうだ。其處で龍一の弟は十八で學校を止め文部省の雇に出て月給十圓から腰辨の第一歩を踏み出し、降つても照つてもテク〳〵通を休まず二十二歳までに二十圓と經登り大に家政を助けて來たのである、しかし今村の父母はお國風の儉約氣質で押通して來たから一家に奢侈の風は少しもなく從つて家政不如意のいやな樣子は見せた事はなかつた。

龍一が法律事務所へ出て初て三十五圓に有りついた時、

父の專一はこれで安心したやうなもの丶判事に轉職するまでは全くの安心とは行かないと言つた。これは自分が判事であつたこと、判事が終身官であること、この二の理由にも出るが、第一官吏でなければ承知が出來なかつたのである。明治三年に龍一といふ男の兒を作つた此中老人は當世に官吏が一等高尙な職業で且つ最も安全なものと信じ切つて理窟も何にも無いのであつた。其處で辯護士は當座の足掛け、其内に親族の玉乃博士が大審院の判事で幅を利かして居るからこれに賴みこんで龍一を是非判事にするといふのが希望で其希望が本人の龍一を首肯かすか如何だかそん

なことは思つたことはないのであつた。

龍一は父が一人決定で判事云々を話しかける時も相手にならなかつた。それは判事が嫌だからではない、たゞ何に由ず父の相手になるのを不好いからである。江崎富彌は此事を知つて居るから結婚問題で今村が無言の行をやるのも此處に原因を有つのではないかと一寸思つた位である。

そして富彌も今村の母上や國ちやんや弟の孝一君や皆な好であるが阿爺樣だけは餘り好かなかつた今村は一週に一度以上、殆ど常例の如く江崎の家を訪るが富彌はめつたに今村の家を訪ふたことがない。たまに訪ふて阿爺樣に捉

まらうものなら不明亮な言語で忠痴と厭味を止め度なく浴せかけられる。富彌はそれが大嫌であつた。

（九）

今村の南向きの六疊の間に五十七八と三十二三の人が差向ひで話して居る。

若いのは當世流行の洋服を着て鍔革の卷煙草入を拈つて甑具にして居る。

年寄は人並より頭が大い。脂切つた顏がむくんで見える。爺むさい短い鬚髯が鼻の下と腮から揉上へかけて生えて居る。太く丸く隆起して其頂の眞紅な鼻、膨ぼつたい瞼。眠

さうで鈍く光つた眼、而も其眼はきよろ〳〵と絶間なく動いて靜に一定のところを見ることが出來ないやうだ。

『全體龍一には惡い癖があつて不可、乃父の言ふことだと鼻であしらつて居るやうぢや。』と低い聲で言つた。

『それは叔父樣の邪推でしよう。』と若年いのが同く低い聲。

龍一の父も、若い紳士も見たところ大きな聲で景氣よく話しさうに思はれるが不思議とさうでない。

『イヤ邪推ぢやアない。今度のことでも決定の着んのは……決定を着けやうと思へば直ぐ着くのを、それをウンだと

もスンだとも言はんで決定を着けんのは皆なさうぢや乃父を相手にせんからぢや。』

若紳士は苦笑ひで無言、心の中では或は然んと思つて居る。

『けれども厭なら厭だ位なことは言へさうなものですがね』と、これは若紳士も不思議だから、つい口に出た。

『それが乃父を相手にせんから言はんのぢや。孝一や國と違つて龍一はどうも乃父と氣が合はん。全體乃父は今の若いものとは餘り氣が合はん方ぢやが。』

そろ〳〵厭味が出はじめた。若紳士は大急ぎで談話の梶

を取り直しかゝつた。

『何しろ困りましたね。先方では兎も角も早く見合を仕やうといふ騒ださうですからね。何とか早く返事をしてやらなければ。』

『まアさう急がんでも可いがね。』

『急がんでも可いじやア困りますよ、中に入つてる者が。尤も僕は間接だけれど。』

『まア可いよ、さう騒がんでも。』

『誰も騒ぎやア仕ません。騒ぐのは叔父様だけぢやアありませんか』

『乃父もさう騒がんがね。』

『それぢやア斷然謝絶つて了ひましよう。先方だつて迷惑ですもの。』と若紳士は少し聲を高めた。

『さうお前のやうに言ふたつて仕方がない……今に國が歸つて來る、歸つて來たら樣子が解るだらう。』と一段聲を低めて、のろ〳〵と粘つこく言つて落着き拂つた容態。

若紳士は中腹。これだもの他が對手にしなくなるのは當然だ。何でもあべこべを言つたものだ。あべこべな風を仕て見せたものだ。毎晩々々醉ぱらつて旋毛ねじれの愚痴やら皮肉な厭味を「あべこべ」式に二三時間も行られては堪る

ものぢやアない。叔母様や國ちやんが可愛さうだ。孝一君は例の超然主義だから平氣なものだらうが龍一君が逃げ廻るのは決して無理でない。我輩なら同居し得ないね。下宿するね。初からこんな阿爺様であつたのだらうか、天性だらうか――アルコール中毒も手傳つて居るに違ひない――など若紳士は默つて色々考がへて居た。此紳士は今村の親族、大審院の判事の玉乃博士の女婿で三年前に初めて今村一家を知つたのである。

『江崎様が在宅て呉れゝば可いが。』と年寄は獨言のやうに言つた。

玉乃は相手にならなかつた。

（十）

使者の國子が間もなく江崎から歸つて來たが、待つて居た程の事もなく不得要領なので二人とも失望した。若い玉乃は

『それぢやア江崎君がこれから龍一君の心底を探らうといふんですね。』

『今のところ左様です。』と國子が答へた

『まるで雲を掴むやうだ。』と老人は忌々しさうに唸るやうに言つた。そして使者の國子に責任でもあるやうに其どん

よりした眼でじろ〳〵國子の顔を見た。慣た國子は氣にも止めなかつた。

『せめて掴まへる雲でも出て居れば方角が取れるが、今の國ちやんの話の模樣では先づ望がありませんね、當分は。』

と玉乃も少しやけ氣味である。

『何故でせう。江崎樣から兄樣に話せば多少か樣子が知れるでせう。』と國子は玉乃の言葉が少し氣に入ない。

『僕は江崎君から龍一君にぶつかつて見たつて手應はないだらうと思ふ。』

『全然？』

『全然か如何だか其處までは斷言出來ませんが、兎に角決して要領は得ないと思ひます。何故なら若し龍一君が江崎君から問れて初めて打明ける位なら、最早とつくに相談して居る筈です。それを彼の仲善が今まで全つきし談話を仕ないといふのですもの龍一君の氣象として江崎君にも言はないと決心した以上。今更ら容易に口を開るものですか。僕は左樣思ひますね。』

『だつて相手が江崎樣ですもの。』と國子は此推測に服し兼た。

『イヤ、武樣の論が當つて居る。龍一が意地張出したもの

なら後へは引ん。私が龍一に相談せんで今度のことを取定めかけたといふのが不平なんぢや。じやから意地張るのも皆な私の面當なんぢや、さうヂャ皆な面當なんぢや。』と年寄は愚痴になつて來た。

『そんなことは有りませんわ。』と國子は愚痴を取消しにかかつた。

『まア面當としても何としても結果は同じことです。』と玉乃武は頭から愚痴を押のけて『どうあつても龍一君が口を開かんとなれば今度の縁談は無期延期ですね。』

國子も年寄も默つて居る

『さうすると一日も早く先方にその旨を通知しやうぢやアありませんか、理由は何とでも着きます。』と玉乃は短兵急。

『兎も角江崎君が兄上に話して見て下すつてからでも可いでせう。通知は。』

『それはさうぢや。』と年寄も賛成した。

『それは三日や四日は遅くなつても仕方がないから、さうしませう。二人の話なら直ぐ濟むでせうから。』と武は問題の落着に近いたのを喜ぶらしい

『しかし通知する前に私からでも誰からでも龍一にお前の返事がないから今度の縁談は無期延期にすると一應ことは

つたが可えぞ。何を考がへて居ゐか解らんから。』と年寄は未練がある。

『それも可いでせう。』と武は唯だ輕く賛成した。國子は父の言を至極尤もと思つた。

此時郵便。葉書の走書が龍一から今夜は歸らぬとの報知であつた。

（十一）

今村龍一が葉書を出したのは江崎を訪問する前に法律事務所で書いたのである。江崎を誘つて一晩泊りで羽根田あたりへ出掛ける積であつたが、妹の國子が江崎を訪問して

居たので此計畫は外れて了つたのである其處で今村の種々の豫想は端から崩れて其夜までに種々の命に遇つたが葉書だけは豫定の通り今村の私宅に着いたのである。

しかし國子は葉書を見るや、自分が江崎を訪て居たことを兄が知つて後に出したものと思つた。激するところがあつて外泊するのだと思ふと心中大に驚いたが顔にも見せなかつた。玉乃が去つた後、父は直ぐ大跌坐で食膳に向つてちびり〳〵と大好物に取りかゝつた。

孝一は父より先に食事を濟して北の四疊半に隱れて了うか、散歩に出るのが常例で決してちびり〳〵のお側に居な

い。父も亦たこれを不足に思はない。頭から別物にして居るらしい。

たゞ痔こけた母と國子は必ず膳の前と横に坐つて柔順く控へて居なければならぬ。そして酒を含んだ口からだらだらとだらしなく流れ出る不足話を謹聽せねばならぬ。しかし其不足話が半分獨言であるから合槌を打つ必要のない場合が多い、それだけは未だしも幸福で、他のことを考へて居ることが出來る、今日は緣談の運が愈々不結果に終りさうになつた理由か不足話がくど〳〵と獨言から初つたので國子は兄の外泊のことを頻と心配して考へて居た。

兄は自分すら未だ打明ないこと、言はゞ秘密を內證で江崎樣に持て往つたことを激したに違ひないと國子は思つた今夜何所へ泊まつて如何な煩悶をせらるゝだらうかなど思ひつゞけて居ると

『國。』突然父の鈍い聲。

『ハイ。』

『江崎君は眞實に何にも知らん樣子か。』

『え、全く御存知ないやうでした。』

『龍一が外に思つて居る女でもあるか、そんな話は無かつたか。』

『おほッほゝほゝほゝゝゝ。』

『笑ひごとぢやアない。』

『だつて其樣お話は出來ませんわ。』

『江崎樣に訊て見れば可えのに。』

『さんなこと私から江崎樣に聞かれるものですか、ね母上。』

『さうね。』と何事も柔順な母は微笑で答へた。父は暫時考がへて居たが。

『私は龍一が江崎の禮ちやんを想つて居はせまいかと思ふが、如何だね。』

國子は母と顏を見合はせて默つて微笑で居る。

『國は如何思ふ？』

國子は尙も答へることが出來ない。

『禮ちやんは年頃で美人で學問も能く出來るのだから龍一が想つたつて無理はない。』

『おほッほ、ほ、ほゝゝゝゝゝゝ』と國子は少し顏を紅らめた。

『お前も能く褒るぢやアないか。』

『それやア褒めますわ……』

『そら見ろ』と得意になつて『そこで第一龍一が禮ちやん

を想つて居ないのなら如何兄様と仲が善くつても彼様度々往くもんぢやアない。それから何よりの證據は龍一が禮ちやんを想つて居るからこそ江崎様に相談を仕ないのぢや、これぢや、全くこれぢや。』と年寄は獨りで合點して了つた。

それなら尙ほのことと承知、不承知の返事は出來た筈だと恰悧な國子は直ぐ思つた。

（十二）

國子は兄の龍一が禮子を想つて居ないとは言ふことが出來ない。

思ひ當る節が全くないでもない。けれど兄の性質として

よし深く想つて居たにせよ決して其樣子を外には表はさない。であるから兄の禮ちやんを戀して居ると口へ出して言ふことも出來ない。

しかし想つて居るのが眞實なら兄は今度の緣談を厭だと初から斷言し得る筈である不審は此處に在る。

つまり國子には父が突然起した此疑問に就いては如何しても急に返事が出來ないのである。

今村の老人はフと思ひついたので決してこれまで龍一と禮子のことなど毛ほども思つたことはない。然し思ひつくや其を例の癖で主張して居るうちに段々眞實らしく自分で

感じて來て、遂に理窟まで着けて了つたので理窟が着くと益々國子の同意を得なければ承知が出來なくなつた。

『如何ぢや國、理由が解つて見ると我の鑑定は動くまい』

國子は唯だ眼をまじ〳〵さして居るばかり。

『如何ぢや。』

『私には解りませんわ。』

『何故解らん、解らんちうことが有るものか、お前に解らんちうことは無い。』

『だつて、そんなこと被仰つたつて……』

『如何あつても我に解つてお前に解らんちう法はない。龍

一の世話は誰がする、何から何まで龍一の事なら皆なお前が爲るぢやァないか。我家で龍一と眞實に話をするものはお前だけぢや。それでお前に解らんちう法はない。』と益々粘つこく攻寄せる。

『アラ私にだつて兄上は別に何にも言ひませんわ。變つたことは。』

『言はないでも樣子で解る。』

『樣子なんて私などに解りやしませんわ、ね母上、他のこゝ違ひますもの。』と國子は眞面目になつた。母上はかゝる場合に處する物を常に持て居る——何方付ずの微笑

『他のことゝ異うから猶のこと樣子で解るのぢや。傍に始終附いて居てそれが解らんちうのはお前が愚鈍ぢやからぢや。』

國子は思はず笑つた。

『愚鈍と言はれて笑ふやうな女ぢやから解らんのぢや。』

國子は又た笑つた。

『笑へ、笑へ。私の言ふことが間違はんことが直きに分る——燗が少し微溫いぞ。』

國子は猶も笑つて

『それぢや父上若しか兄上が禮ちやんを想つてたら如何なすつて。』

『貰ひに往くばかりぢや。』

『若しか江崎樣で否だつて言つたら。』

『否だつて言へばそれまでぢやアないか。』

『さうは行きませんわ、さうすると兄上と江崎樣の仲が妙になつて了ひますから。』

『お前も愚なことをいふ、此方で貰うとなつても無闇に言ひ出せるもんぢやアない。よく先方の樣子を探つて愈々呉れさうだと見込が着いてからのことぢや。』

國子は莞爾笑つて

『あゝ若しか禮ちやんが兄上のところへ嫁て下さるやうなら如何なに可いだらう。』とさすがは年若き少女、いつしか如此いふことを言ふ。

（十三）

今村の宅では龍一は今夜歸らぬことゝばかり信じて居たから十時ごろ戸締にかゝると、突然歸つて來たので一番驚いたのが國子である。

龍一は例の如くずん〳〵自分の部屋に通ると眞闇。國子が大急ぎて洋燈を持て續いて來るのを待つて居る。

國子は机の上に洋燈を置いて

『今夜はお歸りにならんと思つて居ました。』

『如何して。』と今村は机に向つて跌坐を組み、肱を突て腮を支へながら言ふ。

『でも歸らないといふ葉書が參りましたから。』と國子は不審に堪へぬ樣子。

今村は默つて居た。故意ととぼけたのかそれとも葉書を出したのを忘れたのか解らない。斯ういふ事は從來の彼に無いことだ彼是の談話は此際無用と見て取つた國子は

『直ぐお寢みになりますか。』

『國ちやん。』

『はい。』

『酒。』

『今から。』

『可いぢやアないか今からでも。』

『直ぐ持て參ります。』と國子は龍一の脱ぎ捨てた羽織を疊みながら『何にもありませんよ。召食るものは。』

『無くつても可い。』

『ありましたく。今日武樣が故郷から贈つて來つた雲丹を持て來て下さいました。』

『それア上等だ。何しろ早いが可いね。』

國子は直ぐ起て勝手に去つた。龍一は玉乃の奴、又た彼のことで來たのだなと思つた。

間もなく國子は膳を運んで來た。龍一は大概の塲合に自分丈け自分の部屋で食事をする。そして其給仕とお酌は必ず國子の役と決定て居た。

『そらお土産。』と龍一は先づ一杯お酌をして貰つた後でリボンを投げ出す。

『まア綺麗、如何も難有う。』

『禮ちやんとお揃だよ』

『さう？』と國子は龍一の顏を見た。

『今夜江崎へ訪つてそれと同のを禮ちやんに進げて來た。』

『今夜？』

龍一は酒を含んで點額いた。さすがの國子も事が皆な意想外なので一句も出ない。

龍一は平氣で

『禮ちやんも喜んで居たよ。お前とお揃だつて。』

『さう？』と國子はお揃の事よりか龍一が晝間江崎を訪ふて、夜又た訪ふて富彌と如何いふ談話があつたか、そればかりに心を奪はれて居る。

『さすが本場の雲丹だ、美味い。』と龍一は國子の意想とは

全然飛び離れたことを言ひながら一杯一杯と止め度なく酒を流し込んで忽ち一本平げて了つた。

『未だ召上りますか。』と國子は恐れて問ふた。

『未だ〳〵。』

此時次の間で年寄夫婦が何事か言ひ爭ふ聲がする。今村一家特有の低い聲だから明亮とは分らない。

國子は起つて次の室に去つた。龍一は素知らぬ風で雲丹を肴めながら酒氣を吐いて居る。

『父上今夜は不可ませんよ何卒か明日の朝にして……。不可ませんよ。後生ですから今夜は……』と國子の泣聲にな

つて訴へるのが途切に聞えた。間もなく國子が來て
『父樣が此所へ來ると被仰つていくら止めても承知なさいませんが……』とおろ〳〵聲でいふ。
『可いよお出になつても』。
『父樣も隨分酔つて居ますよ。』
『可いよ。』
と言ひ合つて居る中に父はヌッと入つて來た。

（十四）

國子ははら〳〵して居ると父は龍一の膳の向へ坐つて四邊を見廻しながら

『國、お銚子は如何したのぢや、早く持て來て上げないか。』
と何となく樣子が可い。
『私は最早澤山です。』と龍一は頗る眞面目で酔た風は少しも見えない。
『まア可え、久しぶりで一盃貰う。』
『今夜は最早止しませう』
『お前はそれだから不可い、私が折角久しぶりでお前と……』
『ほんとに父上今夜は最早御酒はお止なさいよ。兄樣も澤山だと被仰るんですから。』と國子は横から父の言葉を奪は

うとする。

『お前は餘計なことを言はないでお銚子を持て來るのぢや。』

と父は國子を睨みつけた『でも……』と國子は起ち兼て兄の顔を見ると龍一は下唇を嚙で下を向て居る。

『でもぢやアない、早く持て來るのぢや。』と父は承知しさうもない、更に逆へば事が愈々面倒になるばかりと國子は起つて銚子をかへに行つた。

『如何ぢや、その雲丹は上等ぢやらう。』と父は機嫌を直して更に龍一の機嫌を取らうとする口振である。

『仲々上等です。』と龍一は冷やかに言つた『やはり雲丹は

故郷に限るやうぢや。』と父は珍らしく無いことを獨言のやうに言つて其どんよりした眼に何となく得意の色を見せて居る。

二人は暫時無言で手持無沙汰で居ると、やかてが國子銚子を持て來たので

『サア兄上にお酌をして上げる。』

『まア父上に一ッ差上げませう。』と龍一は盃を父に差した父は飲み干して直ぐ龍一に返し

『お前は今夜歸らないやうなことを言つて來たから如何した事かと心配して居つた。』

『えゝ。』と龍一は言つたぎり默て居る。

『今日玉乃の武さんが見えた、さうだ、此雲丹も武さんが呉れたのぢや。』

『さうですか。』

此時國子は急に父の傍に摩寄つて耳に口を着け聞えるか聞えぬほどの聲で

『今夜彼の談話をするのは止して下さいよ』

『何故や。』と父は龍一にも聞えるほどの聲で不平らしく言ふ。

『だつて何も今夜に限つた事では無いぢやアありません

か。折角兄上が歸宅つていらつしやつたのだから……』と國子も仕方がないから聲を高かめた。

『歸宅つて來たから尙ほ談話が出來る理由ぢや。お前は默言て兄上にお酌をしろ。』

龍一の方から盃を出したので國子は酌をした。龍一は一口に飲み干して又出した。國子は兄の顏を見ながら酌をした。

龍一、聞て呉れ斯うだ、今日武さんが來ての談話にお前が如何あつても返事をしないとならば此緣談は無期延期じや、先方は急いでる事じやから放擲つては置けない、何と

でも理由を作へて其事を通知しなければならんといふのぢや。如何ぢや。我もこれは文句がないのぢや。が其前に龍一に其を事譯つて置かうといふことに談話を決定たのぢや。お前も異存は無からう。』

龍一は默々として下を向いて居たが又た盃を出して酌を促した。國子は父の方に氣を取られて氣が着かないで居ると

『國ちやん。』

國子は驚いて酌をした。

『それには異存は無からう如何ぢや。』

龍一は返事しない。

『如何ぢや異存は無からう。』

龍一は默つて居る。

『これは可笑い。お前はこれにも返事をしないか。』

『だから父上今夜に限つた事ではないぢやアありませんか、最早後生ですから止して下ださいな。』と國子は最早涙ぐんで來た。

『止さない。これは我に無理のところは一もない。これにも返事の出來ない理由はない。』と父は顏色を變へて唇をぶるぶるさして居る。

龍一は徐に机の下の手箱から紙入を出して懷中し、其處に疊んだまゝ置いてあつた羽織を手早く着て、つと室を出た。呆れて居た國子は玄關まで追かけた時、龍一は既に格子を開けて外に出て居た。

續いて駈けだして門を出て見ると晝間のやうに冴えた月影を踏んで龍一は七八間も先を大股に歩いて居た。

國子は門に靠れかゝつて泣き崩れた。

『暴風』休載に就て

休載又休載で實に讀者に對し新聞社に對し申譯がない。

申譯がないが實は已を得ないので、余自身から言つても書く苦勞よりか休載の方がどの位辛いか分らない、けれども實に已を得ないのである。

數ケ月間放擲して顧みなかつた病、友人の勸告も家族の心配も無視して生來のずぼらで蓋をして來た病、それが近來益々面白からず發展するので終に數日前から醫師の厄介になる身となつた、生來のずぼら計りでなく全體醫者にかかるといふことが余の一等きらひの事を敢行したのだからお察しを願ひたい。よく〳〵であるといふ事を。

さて醫者にかゝつて見ると午前はまるで其方に取られて

了う。午後は醫者にかゝらぬ、ずつと以前から廢人同樣で口こそ達者でも筆を執る程の精方はないのである。從つて近頃休載が多い理由もお分りになつただらうと思ふ、實に已を得ないのである。

そんなら此先は如何するのかとの疑問が生ずる。御尤の次第であるが目下の狀態は長くは續かないのである。天候恢復、海濱への交通機關が復舊次第に轉地する筈になつて居る、轉地したら其處から毎日缺かさず原稿を送ることが出來るのである。されば天然の暴風雨が過ぎ去つた後で余の『暴風』が小止なく吹き初めることゝ御承知を願つて此

の處數日間は是非もないことゝ斷念めて頂きたい。

しかし今後運命の神が『くだらない命だ可い加減に切り上げろ』と宣告するか、日本新聞の讀者が『面白くもない小說だ、可い加減に切り上げろ』と怒鳴るならば、余は『左樣なら』といふの外はない。

先づ右二ツとも余に取ては頗る感心しないことで。斷じてさういふことの無いことを願ふ。

（なはり）

決闘家

一

千八百二十九年甲兵の或る聯隊がK州のキリロヴオ村に營陣した。小舍、枯草の塚、青い麻畑及び痩せた柳のある其村は遠くから見ると恰も耕した黑土の廣野の涯際なき海の中に島の如く見える。村の中央に何時も鵞鳥の羽の浮いた凹凸した泥の岸の小池がある。路の向ふ側に池から百歩程の處に長い明屋の悲しげに一方へ傾いた木造の別莊が建

つて居た。此別莊の後に荒庭があつて實を結んだことのない林檎と深山烏の巣の澤山ある高い樺の樹がある。本庭の塀の行き止りに營て浴室であつた小舍に老耄した執事が住んで居た。執事は數年來の慣習で毎朝喘ぎ呻吟めきながら領主の室々を見廻りに庭を突き切つて出掛ける。尤も其等の室には見廻る程のものもない。色の褪めた織物の表の付いた十二の白い肘掛椅子と、銅の取手のある足の反つた櫃が二つと、孔のある四枚の繪と鼻の缺けた黑い石膏細工の亞剌比亞人の像があるのみである。年若く無頓着な此邸宅の持主は一年の半分はビータースボルグに半分は外國に住

んで自分の領地は全く忘れて居る。此領地は其の里古兒酒の爲めに其地方に名の響いた叔父より受けたのである。今日でも尙ほ靑黑い空壜が雜多の埃屑や、書いた處の少ない寫本や、古風の鏡や、カザリン時代の貴族の制服やら、鐵の柄の付いた軍刀やらと錯雜に貯藏庫に轉がつて居る。大佐は此廣大な住宅の一室を占領した。大佐は妻のある言葉數の少ない惡相な睡たげな人である。他の室には氣立のよき活潑で香水臭い女好の聯隊副官が住んだ。此聯隊の士官達の交際は世間普通の交際と變つた處はない。其の中には善人もあり惡人もある。才物も居るし鈍物も居る。其一人

アヴデイ、イヴノヴ井チ、ラチコフと云ふ者は決闘家として有名な者であつた。ラチコフは小作で、肥太つて居ない小い黄ばんだ干燥いだ顔の、髪は薄くて黒く、特徴のない容貌の、どんよりした眼の男である。彼は幼少の時は孤兒となつて缺乏と困苦の裡に人となつた。此男はまづ二三週間は人と穏に居られるが、其内直に惡魔が附いて居る樣に人を苦しめ、人を侮辱し、誰にでも喧嘩を賣つて、決して人に構はずには居られないのだ。併しそれかと云つて同僚との交際を避けはしない。が香水副官の外は親密な契盟があるでもない、骨牌もやらず、酒も飲まない。

千八百二十九年轉陣の少し前にフキオドル、フエヲドリツチ、キスターと云ふ魯西亞の貴族で獨逸血統の髪は美しい、柔和で、教育のある博識な青年旗手が此聯隊へ這入て來た。彼は二十一歳迄母と祖母と及び二人の叔母とに庇はれて父の家で育つて軍隊へ入つたのは今老年になつても鳥毛の白い冑を見れば激情する祖母の望に從たのである。彼は軍事に熱狂して勤めて居るのではない、唯中心より其義務を盡すのみである。伊達者と云ふではないが、何時も清潔な服を着け、身の周圍は趣味津々として居る。彼は陣所に着くと直ぐ長官に挨拶して偖て自分の室の整理に取掛

つた。彼は勝手道具、毛氈、書棚其他の安物の世帶道具を持つて來た。壁と扉の貼付をなし、屏風を立て、庭を掃き、厩と料理の間を定め、浴場迄も整備した。略一週間程此が爲めに費した。併し其後は自分の室へ行くのが何より樂みであつた。窓に向け色々の物を載せた書卓がある。室の一方の隅にはシルレルとゲーテの半身像と並んで書棚があり壁には色々の地圖と、四つのグレベドンと鐵砲とを掛け、机の傍は綺麗な吹口の付いた煙管が並べてあつてまた次の間には絨氈を敷詰め、戸は皆鎖して錠を下ろし、窓には幕を下げて、萬事整頓して清潔である。

同僚達の營舍は全く反對で、泥庭は歩くとも出來ない。次の間には粗い布の剝げた屏風の蔭には何時も鼾聲が聞える。廊下には燒け藁が散亂し、暖爐の上には長靴や眞黑になつた菓膏の壺が轉がり室内には白墨で目印を付けた歪んだ骨牌臺を据るテーブルの上には冷めた黑ずんだ褐色の茶の半分ほど入つたコップを載せ、壁の處には滑めらかな大分痛んだ巾の廣い布の安樂椅子を置き、窓闌の上には煙草の吹殼が散て居る。主人公は眞赤な顏をして亞細亞製の縫のある室内帽を冠つて頑丈な塵埃の付た肘掛椅子に倚り、其側には慊に太つた不愉快の臭のする眞鍮の付いた頸輪を

箝めた犬が鼻聲を立てゝ居る……。扉は殘らず明け放しである。

フキオドルは好ましき感象を同僚達に與へた。温良で謙遜で熱情に富み、且つ恐らくは士官達に見るべからざる美に對する趣好ある爲めに彼等は渠を愛した、皆彼をお孃さんと呼んだ。猜疑を以て渠を見たものはアヴデイ、イヴアノリッチ唯一人のみであつた。或日練兵の濟んだ後でラチコフは其傍へ行て唇を尖らし、鼻を膨らして言ひ出した。

『ナスター君お早う。』

キスターは暫時困まつて彼を視た。

『ナスター君誠に結構なお天氣で！』

『僕はキスターだよ。』

『君は左樣は云はないキンダー、バルサム君よ。』

フキオドルは向き返つて家路に向つた。ラチコフは齒を露き出して見送つた。

翌日練兵が濟むと直にラチコフは復たキスターの所へ遣て行つた。

『偖て、是から君は何うするキンダー、バルサム君。』

キスターは立腹した、眞直にラチコフの顏を見た。

ラチコフの小さい汁の多い眼が憎らしい喜悅に充ちて光つ

て居た。

『キンダー、バルサム君：君に云ふて居るのだよ。』

『君、君の戯謔は馬鹿げて、また無禮ではないか、ねえ、君、馬鹿げた無禮だらう。』

『決闘は何時にする？』

ラチコフは悠然と返した。

『君の好い時に……明日にも。』

翌朝兩人は決闘をした。ラチコフはキスターに薄傷を負はせた。そして介副人達の驚いたことにはラチコフはキスターを手で抱へて詫まつた。キスターは二週間外へ出られなかつた。ラチコフは幾度も之を見舞て、其全快した後彼と親睦を結んだ。是が青年士官の膽力を喜んでか又は悔悟の念に依てゞあるかは明言し難い……。何にせよ決闘以來ラチコフはキスターの側を離れない。始めて彼をフヰオドルと呼んで、後では單にフユダと云つた。キスターの前に在る時は全く別人となつた、そして可笑しい話だが此變化は決して彼に取て幸福ではなかつた、何故なれば、溫順柔和など云ふことは彼の柄にない。如何しても人の同情を得ることが出來ない。之れが全く彼の運命である！。彼は多少人に對して威權を振ふべき特權を有た人の部に屬する

が、併し天は此の如き特權の保持に缺く可からざる條件を附與するを拒んだ。少しも教育を受けず、才智に於ても優れた處もなく、遂に己れを顯はすを得なんだ。彼の惡心は恐らくは素養の缺乏の自覺と始終不變の假面の下に匿れんとする希望から起つたのである。彼は始めは殊更に努めて人を侮慢せんとして、其の人を威嚇する能はざるを悟るに及んで、是に始めて中心より侮慢するに至るのである。彼は極めて卑俗の談柄の外は心より非難して其話の腰を折るを甚だ喜んだ『僕は何事も知らん、學問もない、また才能もない。が君も同じく何も知らない、僕の前に才能も示さ

ない』斯く獨語する。キスターは或は此點を捨てさするを得たるならん。何となれば此野卑の男は彼と近付になる前には、眞に理想的なる即はち利己心なき、單純なる心を以て夢想に耽り、他人には寛宥にして己れに薄き人に遇つたことはないゆゑである。アヴディイ、イヴアノリッチは時々キスターの室へ來て、煙管へ火を點け、靜かに肘掛椅子に坐る。ラチコフはキスターと居れば己れの無學の故で輕蔑されない、彼が獨逸的の謙遜に倚賴したのは大に理ありであつた。

『サテ、君は昨日何を爲た？　本を讀んだのだらう、エ、

賭けるよ。』

『左樣、讀書を爲た。』

『それで、何を讀んだ？　サア、話して了へ、話して了へ。』

アヴディの調子は何所迄も滑稽だ。

『僕はクライスト氏のイデルを讀んだ。ア、、實に美い、君が構はずば數句を譯して聞かせやうか？』

キスターは熱心に譯讀し、ラチコフは額に皺を寄せ　唇を結んで注意して聽いて居た。

『然り、然り、艶麗だ……、實に艶麗だ……僕は其れを讀んだ樣に思ふ……實に艶麗だ。』

『切望、ルイ十四世に就て如何なる意見を有て居るか聞かせ給へ。』

願ふ樣に又其話を嫌がる樣に言ひ足した。

キスターはルイ十四世の議論を始めた。ラチコフは多分は解らずに、一部を誤解して、時々口を出して耳を傾けた。彼は冷汗を流した。『ハテ、自分から詰らぬ事をして居るのではあるまいか』と考へた。併しキスターは話を止めない、此無邪氣の青年は內心に學問を爲たい願が友人に起つたこと考へて喜んで居た。嗚呼キスターに聞たのは學問を爲たいからではないのだ。神ぞ知る、實は自分は如何な頭を

有て居るか則はち實際鈍いのか又た單に鍛へてないのかを決せん爲めであるのだ。『己れは眞に癡鈍だ』斯う度々獨語して苦笑を爲る。そして身を窄め、野卑に傲慢に傍を見廻し、若しチラと同僚を見付ければ憎げに自分を嘲笑し、齒の裡で斯う呟く。『全く君達は大層學問があり、善い教育を受けて居る……僕は君達に示さん……丈け限りのことだ……』

士官達はキスターとラチコフの突然の親睦に就て長く議論はしなかつた。彼等は己に決鬪家の不可思議な行ひに慣れて居つたからである。彼等は『惡魔が子供と友に爲つた』

と云つた。キスターは誰れにても己れの友を賞むるに熱心であつた。誰れもラチコフを怖れて居るから之に反對する者はない。ラチコフは人の前ではキスターの名を口に出さなかつたが香水副官との親睦は消えた。

二

魯西亞の南方の地主は皆舞踏を催して士官を誘ひ娘を之に娶はせるに機敏であつた。キリロヴオー村から七里許の處に四百ザウルの土地と可なり廣い住宅を持つたペレカトフと云ふ此種の紳士が在つた。ペレカトフにはマセンカと云ふ十八になる娘と、子ニラ、マカリーヴナと云ふ妻があ

る。ペレカトフは嘗て騎兵士官であつたことがあつたが田舍暮しの好な爲めと惰性との爲めに此所に引退して、中等の地主の暮し向きで安穩に暮らすことゝなつたのである。

子ニラ、マカリーヴナはモスコーの有名なる紳士の種で立派な嫡出ではない。其女の保看人は之を己れの家で充分に注意して教育したと云ふことであるが、餘り賣口の宜くない品物なればとて初めて申込のあつた時に其女を手放した。マカリーヴナは容色醜かつた、そして父は持參金として僅に一萬圓を與へた。で彼は甚だペレカトフに執心であつた。ペレカトフの方でも兎も角も斯る有名なる紳士の近

親で高等なる教育を受けた開發せる淑女と結婚するは甚だ滿足する所であつたのだ。此高名なる人は結婚の後にも猶ほ若夫婦に監督權を擴張し、彼等より鹽漬の鶏を持て來てペレカトフを我親愛なる兒と呼び、時としては單に我兒と呼んだ。夫人は全く良人を支配し、萬事を處置し、極めて鋭眼に全財産を監視した。尤もペレカトフの爲るよりは遙かに善く。夫人は過度に良人を束縛せぬが、能く之を掌の裡に把持して、自ら良人の衣裝を註文し、田舍紳士に似合はしき英國風に着飾らせた。夫人の指圖に任せてペレカトフは成熟した覆盆子の如き大犹を隱さん爲めに那破翁風

の少しの顎髯を蓄へた。マカリーヴナは自ら良人の笛を吹くを吹聽し、併せて笛を吹く人は皆顎髯を生すを語るを常とした。且つ兩人は双方共喜んで能く其約款を守つた。則はちペレカトフは朝早くにても高い清潔な襟を附け、髪を能く梳き、磨き立てゝ居た。ペレカトフは能く我運命に満足し、己が好む通りに食事し、充分睡眠した。夫人は其地方人の所謂外國風なるものを輸入し、數人の婢僕を置き、小清潔なものを着せた。夫人は野心勃々として少くも其地方の貴族の家扶位の積りで居る。併し其地方の紳士達は心から満足して其所で食事をしながら、進んで其良人を擇ば

ず却て先づ退職大佐バルコルツに行き、次には退職中佐バランダコフに行つた。ペレカトフは彼等には餘り偉過ぎて見えたからであるペレカトフの娘マセンカは容貌は父に似た。マカリーヴナは娘の教育に就ては頗る苦心した。マセンカは自在に佛語を操り、立派にピアノを彈いた。娘は中丈で肥つた方で、色は白く、肥り氣味の顏は温和な樂しげの笑を含んで輝いて居て、亞麻の様なる多過ぎない髪の毛、鳶色の眼、快活なる音聲等凡て皆快心のもので、そして夫れ丈けである。併し一方に於ては虚飾と態とらしい處なく、田舍娘に似合はず教育の豐富なると、擧止の自由なる

と、言語容貌の質樸なるとは特に擧ぐ可き點である。此娘は我思ふまゝに發達した。母は少しも之を拘束しなかつた。

或日の正午にペレカトフの家内中皆客間に集まつた。主人は丸形の綠の上衣を着け、高い斑色の頸飾をして、豌豆色の洋袴に革帶を締めて、蠅を捉ふるに餘念なく窓の處に立ち、娘は刺繡臺に向ひ色澤のある優しい手を寛やかに重重しく地布の上で上げ下げして居る、マカリーヴナは默つて床を瞰ながら椅子に倚掛つて居る。

『主公、キリロヴオの聯隊へ案内狀をお出しになりましたか？。』

『今晩の案内狀かえ？、確に出した我愛人よ！』

（夫人を阿母樣と呼ぶのを堅く止られて居るのだ）

『其人達の中には屹度娘達と踊れる紳士はありますまい。』

と夫人は續けて云うた。良人は助け人がないので挫けた樣に太息を吐いた。

マシヤは直ぐ始めた。

『阿母さんもラチコフを呼んだのですか？』

『ラチコフさんとは誰だえ？』

『矢張り士官さんです、面白い方だと皆さんが有仰ますよ！。』

『何んな人だえ。』

『ハア、好い男でもなし又若くはありませんが皆さんが怖はがつて居ります、其方は恐しい決闘家ですとさ、(母は少し苦い顔をした) 妾は其方を見度う御座います。』

セルゲイ、セルゲイチは遮つて言つた。

『何所に見度い處があるのだ、バイロン卿に似て居るだらうと思ふか? (其の時丁度バイロン卿の話を爲かけて居た。)滿らない事だ、己れも一度は仕合者として恐しい性質を有て居た事もある。』娘は駭いて父を見上げ、笑ひ出し、遂に飛び付いて其頰に接吻した。夫人は微笑した……。が

併しセルゲイ、セルゲイチの云ふ所は眞理であるのだ。

『何うか分らないが多分來るだらうよ。』

夫人は斯う答へた。娘は深い息をして居た。父は云ふた。

『汝はその男と戀をして箝つてはならぬよ、汝の樣な娘達は皆な昔の通り……ハテ、何と云つたら善いのか? ……小說的だから……。』

『いゝえ、左樣ではないのです。』

と娘は無雜作に答へた。

夫人は冷かに良人を眺めた。良人は多少困まつた體で時計の鎖を弄んで居たが、遂に机の上から英吉利製の緣廣

の帽子を取て、持地の見廻りに出掛けた。若犬は怖々ながら従順に跟いて行つた。賢しい奴なれば、主人が内に在ては甚だ權威の無いのを能く承知して居るので切めて自分丈は甚だ溫順に謹慎に擧動つた。

夫人は娘の傍へ行つて其顏を引き上げて愛情に迫つて娘の眼を見詰めて聞き糺した。

『お前が戀に陷つた時には私に知らせて呉れるかい？』

娘は母の手に接吻し微笑みつゝ承知して數回點頭いた。

『承知しておくれよ！』

マカリーヴナは斯う云つて娘の頰を輕く打つて夫の後を追

ふて行つた。娘は椅子に倚掛り胸の上に首を垂れて、指を組合せ、上眼を使つて暫時戸の方を見て居た、生々した頰の上には微紅を帶びた。遂に吐息をしながら起ち上つて再び仕事に掛かつたが針を落し、手の上に顏を載せ、針の先を嚙みながら夢想に入つた……がまた手を伸して、自分の肩の邊を見て立ち上り、窗の所へ行き、笑ひ出し、帽子を取つて庭へ出て行つた。

其晩八時に客が來始じめた。ペレカトフ夫人は極めて慇懃に夫人方を、マセンカは娘達を迎へて饗應した。主人は收穫のことを話しながら始終妻の方を瞥て居た。間もなく

態と少し後れて青年士官達が遣つて來た。大佐も亦キスターとラチコフを連れて現れた。大佐は夫人に兩人を紹介した。ラチコフは默つて腰を屈め、キスターは常の如く『非常に愉快……』と唸つた。ペレカトフは大佐の前に進み、熱心に其手を握り、甚だ誠意を罩めて大佐を瞻た。大佐は機嫌よくそれを止める風に見えた。其内踊が始り、キスターはマセンカに相手を申出でた。

室の隅まで二十度も跳び廻つた後、此組が始めに踊ることになつた時にマセンカはキスターに聞いた。

『何故貴郎のお友達は踊らないので御座います?』

『何の友達ですか?』

マシヤ（マセンカを略稱して云ふ）は團扇の先でラチコフを指した。

『彼の男は如何しても踊りません。』

『何故そんならお出なすつたのでせう?』

キスターは參つた。

『愉快を盡す爲めでせう。』

『貴郎は此聯隊へは近頃お移りに爲つた樣に思ひますが?』

『此聯隊へですか? え、近頃です。』

笑を湛へてキスターが返事をした。

『お退屈ではありませんか？』

『否如何致して斯んな愉快なお交際と景色がありますもの！』

キスターは景色を讃め出した。マシヤは首を擡げずそれを聽いて居る。アヴデイ、イヴアノリッチは冷淡に舞踏を見て偶の方に立つて居た。

『ラチコフさんはお幾歳で御座います。』

突然娘が聞き出した。

『左樣三十五と思ひますが。』

『皆さんがあの方は險難……激烈な方だと有仰ますが。』

マシヤは急はしく語を次いで云つた。

『あの男は多少短氣の方ですが……併しそれでも善い男です。』

『でも皆樣が怖がつて居らつしやると申します。』

キスターは笑つた。

『貴嬢も矢張？』

『ハイ私も怖う御座います。』

『全くですか』

其時に八方から『貴君方の番です、貴君方の番です』と

呼立られた。兩人は立ち上り室を突切て踊り出した。

『お祝を申上げる、此家の娘が君のこと許り聞て居るぞ。』

舞踏が濟んだ後でキスターはラチコフの所へ來て斯う云つた。

『全くか？』

ラチコフは嘲笑つて答へた。

『誓て全くだ、あの娘は頗る美しいではないか？マア見給へ。』

『どれだ？』

キスターは指で示した。

『ム、醜くはない。』

斯う云つてラチコフは欠伸をした。

『情の無い男だ。』

と叫んでキスターは踊の相手を探す爲めに立去つた。

アウデイ、イヴアノリッチは欠伸しかも大欠伸をしたが、實はキスターの話を聞いて非常に嬉しく思つた。好奇心を起す迄に己惚れた。口では戀愛を賤んで居るが實は内心で女の愛を得るのは六ケ敷が冷淡と倨傲を裝ふのは易々たる事と考へたのであるイヴアノリッチは人の心を惹く質でなく年も最早若くもなかつた。併し一方にはまた恐ろしい評

判を取て居たので充分愛を強請する權利を有て居たが、何時も怖らしい寂寞と苦々しい沈默を喜んで居た爲め、女の注目を惹いたのは是が始めであつた。一層の親睦を結ばうと申し出た女もあつたが彼は人を激昂させる樣な頑固を守て其提供を拒んだ。彼は情事は己の柄にないのを承知して居た。（女と出遇て互に語り合ふ折に始めは粗暴で野卑で遂には甚しく亂暴になる）。彼はこれまで嘗て二三の女と交際つたが漸く親密になるかと思ふと直に向から冷淡になつて急に逃げて了つたとのあるを記憶して居る……で遂に不得要領に付し、天命の拒める處を嘲笑して居ることゝし

た……嘲笑と云ふものは恐らくは皆如此ものであるのだ。淡泊、自然否な寧ろ感情の表彰の如きは到底彼に相應しない、激怒した時も尙ほ常に障壁を築いて居た其哄笑するときに凌辱を免かるゝ者はキスター一人のみであつた。親切なる此獨逸人の眼は同情に充ちた寛宥なる喜の爲めに輝いて居る。彼がアヴデイにシルレルの中の好める章句を讀んで聞かせると其愚物は狼の樣な下眼を使つて向ふに腰を据ゑて之を聽いて居るのである。

此夜キスターは疲れ果てる迄踊つた。キスターは決して其隅を去ずに額に皺を寄せて盜目にマシヤを見て居て、若

しマシヤと眼が逢ふと直に平氣を裝うて濟まして居た。マシヤは三度迄キスターと踊つた。此熱情の青年は信頼の念を娘の心に吹き込んだ。娘は隨分快活に饒舌つたが實は心中平和でない所がある、ラチコフが其心を擾したのだ。マザルカ調が鳴つた。士官達は踵を踏み立て肩章を搖り上げて跳び回り出した。軍人でない者も亦踵を踏み立てた。

ラチコフは己の席を動かないで踊の組々が其側へ回つて來ると其を見送つて居た誰れか彼の袖の處へ觸はつたものがある。彼は傍を見廻した。隣に居た人がマシヤに指して彼に示した。マシヤは俯し眼にラチコフの前へ立つて其手を

差出して居た。ラチコフは初めは狼狽々々して見詰めて居たが、直ぐ無雜作に劍を外づし、帽子を床へ抛げ出して、無作法に肘掛椅子の間を通つて、マシヤの手を取つて恰も厭なながら已むを得ず面白くもない義務を果して居ると云つた風で、跳びもせず踏付もせず、只圓く廻つて居た……マシヤの胸は烈しく動悸が打つて居る。

娘はとう〳〵口を切つた。

『何故貴郎はお踊なさいませんの？』

『踊などには一向氣も止めませんから。』

とラチコフは答へた。

『貴嬢のお席は何所ですか？』

『其向ふで御座います。』

ラチコフはマシヤを其椅子へ連れて行つて冷かに腰を屈めて隅へ立戻つた……併し心臓には愉快な鼓動が打つて居た。

キスターはマシヤに一所に踊らうと申出でた。

『貴郎のお友達は何んと奇體な人で御座ませう。』

『貴嬢には餘程面白いと見える……。』

フヰオドルは緑の親切な眼に妙な光を浮べて答へた。

『左様で……併し彼の方は屹度お不仕合ですよ。』

『不仕合ですと？　何故さう思ひます？』

『貴郎は御存知ないのです、御存知ないのです……。』

マシヤは大事件さうに嚴かに首を掉て云つた。

『お話しなさい、何う云ふ譯ですか？』

マシヤは復首を掉て烏渡ラチコフの方を見た。ラチコフはそれを認めた。そして少し肩を窄め、他室へ立去つた。

三

其夕以來數月を過ぎた。ラチコフは一度もペレカトフの家へ行かなかつたがキスターは可なり度々音信れた。子ニ

ラ、マカリーヴナに付て想像して見た所もあるが彼を引き寄せた者は彼女ではないキスターはマシャを好いた。情事には不經驗で未だ打開けて、切り出したことがないから單に理想と感情の交換を以て非常な快味を得た。且つ彼は若い男女の間には平和な高尚の友情の生ずべきものなりとの無邪氣な信仰を有つて居た。

一日飼養の屆いた輕剽なる三頭の馬を付けた馬車をペレカトフの邸に疾驅した。恰も夏のことで熬り付て暑い日であつて何所にも一片の雲もない。蒼空は地平線の上の所で濃く黑ずんで夕立雲と間違ひさうであつた。ペレカトフの

住居は夏の住居の爲めに建てたのであつて何時も廣野を見晴して窓は皆直接に日に面して居る。子ニラ、マカリーヴナは早朝から殘らず扉を鎖てた。キスターは涼しい薄暗い客間へ進んだ。光線は床の上に長い線を引いて、壁には短い細い縞を揃へて居た。ペレカトフの家族は親しげにフキオドル、フエヨドリッチを迎へた。晝餐後マカリーヴナは自分の部屋に行つて横になつた。ペレカトフは客間の安樂椅子に掛けて居た。マシャは窓の傍でキスターと差向つて刺繍臺に坐つて、框を擴げずに、兩手の上に首を載せて輕く其れに倚掛つて居た。キスターは何か話し出した。マシ

ヤは何か待て居るものがある如き風で、それには氣も止めずに聞いて居て時々父の方を見て、而して遂に思ふまゝ擧動ひ出した。

『御聞きなさい！……も少し靜に御話なさい父は眠入て居ります。』

ペレカトフは全く例の如く首を垂れ、口を少し開けて、安樂椅子の上に睡つて居つた。

『御話は何ですか？』

キスターは好奇心に驅られて問ひ返した。

『貴郎は御笑ひなさいますか？』

『いゝえ、全く……。』

マシヤは首を俛れて顏の上半丈が手の外に出て居つた。少し躊躇しながら、半ば口の裡で、何故ラチコフを連れて來ないかと聞き糺した。之れは舞踏後始めて聞いたのではない……キスターは其譯を話さない。マシヤは怖々組合せた指の上から覗いた。

『私の考へて居る處を打開けて御話しませうか？』とキスターは問うた。

『オ、、御話しなさいとも、勿論。』

『私はラチコフが貴孃に強い感象を置いたと思ひます。』

『いや、いや、しかし……。』

とマシヤは答へて、仔細に繻形を吟味する態をして、前の方へ俯いた。日光の細かい縞が髪の毛に置かれた。

『そこで、しかしとはと……。』

と笑を含んで言つた。

『サテ、貴郎は御覽なさらんのですよ……御覽なさらんのですよ……彼方は……。』

娘は頭を擡げた。日光が眼の所へ射した。

『彼方は貴嬢に面白いでせう……。』

『サテ……左樣で……。』

マシヤは寛々と話した。少し顏を赧めた。少し顏を外らした。そして其儘に居て話を進めた。

『彼の方にあんな何んの所がありますよ……貴郎は私を笑つて居らつしやいますね。』

急にフキオドル、フエヲドリツチを視て云ひ出したフキオドルは想像の及ぶ限りの溫和な笑顏をした。

『私は私の考へる限り何も彼も打開けて御話しませう。貴郎は甚だ……（精一杯に云ふた）善い御友達です。』

キスターは御辭儀をした。マシヤは話を止めて怖々キスターに手を差出した。フキオドルは謹んで其指の先を抓ん

だ。

『彼の方は至極偏屈な人ですね。』

と云ふて復た刺繍框の上へ肘を落した。

『偏屈ですと？』

『勿論です、偏屈ですから私に面白いのです。』

と賢しくも云ふた。

キスターは眞面目に答へた。

『彼の男は尊く勝れた男です。士官達は我聯隊に於ける彼を知らないので、彼等は深く觀察しないのです。只表面を視るのみです。彼の男は勿論苦々しく、人好がせず、短氣

ではあるですが併し心立は善いのです。』

マシヤは熱心に聞いて居た。

『彼の男を連れて來ませう。私は何も、貴嬢は怖がることはない。左樣惚々するには當らないと云つて遣りませう……私は彼男に告げてやります……サウ〳〵私は何と云つて善いか承知して居ます……唯併し貴嬢は私が……すると思ふてはいけませんよ……（キスターもマシヤも心が混雜した）夫は扨措き兎も角貴嬢は彼の男を御好きです？』

『勿論好きますよ、私が何の方でも好く樣に。』

キスターは悲しげにマシヤを視た。

彼は滿足した風で云ふた。

『宜しい、〳〵、彼の男を連れて來ます……。』

『いゝえ、夫には……。』

『宜しい、夫で宜しい、萬事は私が方を附けますから。』

『貴方はあまり……。』

マシヤは笑ひながら云ふてキスターに指を當てたペレカトフ氏は欠伸をして眼を開いた。

『ハテ、私は全く睡つて了まつたと見える。』

と駭いて唸つた。此疑と惑と此驚駭は毎日繰返される。

キスターとマシヤはシルレルの批評を始めた。併しフヰオドル、フエヲドリツチは心中穩かでない。彼は心中に嫉妬の如きものゝ起れるを感じた……そして寛厚にも自ら我を卑んだ。ペレカトフ氏は棒の上を犬を跳ばせて、犬が恭々しく尾を掉て己のが體を撲ち、眼を細くして居る間に、彼は自分が夫れを仕込んだことを吹聽した。

其中に暑が減じ、冬風が吹き出した時に、家内中樺の叢の中へ散歩に出掛けた。フヰオドルは其吩咐を實行すべきを知らする風をしては始終マシヤを視る。マシヤは直ぐ獨りで困まつて幸福に思ひ又面白くなくも思ふた。キスターは突然付き端もなきに上機嫌で抽象的に戀愛と友情の議論

を始める。併しチニラの輝つた鋭い眼を見付ては直ぐに話頭を轉じて了ふ。入日は美しく照輝いた。廣い平な牧場が樺の叢の前方に開いてある。マシヤは此所で鬼ごつこをせうと思ひ付いた、下女下男共は叢から出て來た。ペレカトフ氏は其妻とキスター―はマシヤと相倚つて立つて、下女共は遠慮して少さい聲を出して駈けて來た。ペレカトフの從僕は大膽にもチニラを其配遇者より引放し、下婢の一人は彼方で恭々しく主公と組んだ。フヰオドルはマシヤと分れないで己のが塲所へ返つて來る毎に、二言三言話しかける、マシヤは駈けたので眞赤になつてニコ〳〵して髪を

撫でながら其れを聞いた。晩餐後キスターは辭し去つた。

其夜は靜な星の輝いた夜であつた。キスターは帽子を脱いだ。彼は情が高ぶつて居た。喉には何か塞つて居る樣な心地がする。彼は遂に高く獨語した。

『さうだ。彼娘は彼を愛して居る。彼等を一所にして遣らう。僕は彼娘が僕に置いた倚信に充して遣らう』假令尙ほ未だマシヤの方にラチコフに對して定まつた情あるを證する程のものなく、又キスターの考へでは單にマシヤの好奇心を煽つた迄であつたが此の時に至ては既にキスターは心中に立派な小說を作つて了つて、其事件に關する己れの義

務を定めた。彼は己が情を犧牲に供せんと決心した。そして心から歸服するのみで、彼の女に對して別段他の感情を懷いて居ないが故に、益々之は容易のことゝ考へた。實はキスターは友情と、己れの認められた義務との爲めに我身を捧ぐるを得る者である。彼は澤山本を讀んだ、そして自ら經驗もある尙物を見透す人と思ふて居た。彼は我が假說の眞なるを疑はない。彼は人生は際限なく變化するもので決して同ものが廻つて來ないのを信じて居る。キスターは漸々自から脫魄の樣となつた。彼は之れが己の使命なりとの情を抱いて樂むに至つた。則ち內氣で愛らしき少女と

恐らくは生れてから人を愛慕し、又愛慕されるとのない爲に頑固になつた男との橋渡となり、兩人を引合せ、互に其情を打開けしめ、其の後己れが供せる犧牲の偉大なるを人に知らしめずして、手を引かうと決心した。何んと立派な行爲ではないか？　無邪氣な妄想家の顏は夜の冷やかなのにも關らず燃立つた……。

翌日早朝に彼はラチコフの所へ廻つた。

ラチコフは常の通り煙管を煙らして安樂椅子の上に橫になつて居つた。

『僕は昨日ペレカトフの家に居た。』

彼は多少眞面目に云ふた。

『さうか？』

ラチコフは冷淡に答へて欠伸をした。

『實に彼等は立派な人達だ。』

『本統にか？』

『僕等は君の噂をした。』

『有難う誰と僕の噂をしたのだ？』

『老人とサ……、尤も娘とも。』

『ア、、あの……小さい肥滿つた奴とか？』

『あれは立派な娘だ。』

『全くだ、皆んな立派だ。』

『イヤ君の彼の娘を知らない、僕はあんな賢い柔和で感情的の娘に遇つたことがない。』

ラチコフは鼻で歌ひ出した。

「余は敢て謂ふ、汝はハンブルヒ雑誌にて如何に一昨年ミウコッヒが勝を得たるやを讀めりと……。」

『併し僕は君に斷言する……。』

『フエダよ君は彼の娘に惚れて居るな。』

ラチコフは嘲笑つて斯く云ふた。

『少しもそんなとはない、僕は考へもしない。フエダよ君

は彼の娘を愛して居るのだ！』

『何んたる下らぬことを云ふ！　恰も人が……し得ぬ様な……。』

『君は彼の娘を愛して居るのだ我心よりの友よ。我寵の甲蟲（槌）よ！』

アヴデーは語調を引き伸して饒舌つた。

『ア、、アヴデー君は全く耻づべき人だ！』

キスターは困つて云つた。

若し他の人であつたならラチコフは最早我慢が出來ない處だ。彼はキスターを非道く嫌らない。

キスターは低聲に喃いた。『宜し、〳〵、獨逸語で云へ！左様怒るな！』

『聽け！　アヴディイ！』

と熱心に云ひ出してラチコフの傍へ坐つた。

『僕が君の事を心配して居るのは君も知て居る、（ラチコフは顔を皺めた）併し白狀するが、君には僕の好かない處がある……。誰れとも友達とならず、家へ引籠て嬌柔の人と交際ふのを全く厭ふのも尤のことだ。

偖て然るに世の中には嬌柔の人があるがそれは皆首を刎ねて了へ！、君の生活が罔欺され若々しくなつたのは何故

だと思ふ？　勿論人の腕へ衝き當るにも當らないが、併し何故君は誰れにでも背を向けるのか？ソコデ君は何時かは僕をも其樣に拋げ出すのだらう。』

ラチコフは冷かに煙草を燻して居る。

『アヴディイよ、僕の外誰れも能く君を知て居るものゝないゝのは何故である、君に德あれば人が如何君のことを思ふか知つて居る筈だ。』

暫時默つて居た後キスターはまた云ひ足した。

『君は德なるものを信じないか？』

『信じない！……否や僕は信ずる……。』

ラチコフが喃いた。

キスターは感情的に其手を握つた。そして情の滿ちた聲で始めた。

『僕は生涯君と和睦をしなければならない。君は段々幸福になつて花が咲く……さうだ花が咲くだらう。其時には僕は如何に嬉しからうか？　只だ時々僕に君の時間の都合を任せて呉れなければならない。今日は何曜日だか？　月曜日と……明日は火曜日と……水曜日に左樣だ水曜日に一同にペリカトフの家に行かう。

彼の人達は君を見るのを喜ぶだらう……僕等は其所で愉